

L & C
bulletin

vol. 6

contents

02 **巻頭言** 「人文系部局の再編と研究科の将来構想」 福田 真人

イベント紹介

- 03 ・国際シンポジウム “American Literature/Culture in a Global Context”
(「グローバルな文脈の中でのアメリカ文学/文化」)
長畑 明利
- 04 ・国際シンポジウム「世界と対話する—世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼」
(Japan's Dialogue with the World: How the World Sees Japan, How Japan Sees the World)
中村 登志哉
- 05 ・愛知県芸術劇場との共同企画「石井漠・石井みどり・蔡瑞月とその時代——日台モダンダンスを拓く」および
国際シンポジウム「戦中戦後の身体芸術とメディア—台湾・日本・中国の連鎖」
星野 幸代
- 06 ・国際研究集会「日本における食と災害文化史研究 —— 海外の視点を通して」
伊藤 信博

研究報告・近況報告

- 07 ・文学部から国際言語文化研究科へ、再び文学研究科へ 鬼頭 孝佳
- 08 ・Overview of PISA 2012 Results and Japanese Educational Goals: Foundation for the
Development of Curriculum Connecting Design Education and English Communication
(Speaking, Listening, and Writing)
Meagan Kaiser¹ Osamu Sahara²

著作紹介

- 09 ・『日本亡命期の梁啓超』 李 海

2014年度オープンキャンパス・ポスター発表

- 11 ・Richard Brautigan の作品における自然描写 — 菅井 大地
- 12 ・補語の使用に見られる不均衡な現象について - 中国語の受身文の場合 — 路 浩宇
- 13 ・自然会話における「んだ(の)」の語用論的機能 - 共起表現と前接する品詞に注目して — 市村 葉子
- 14 ・ポアソン分布および線形回帰モデルとの比較から見るエッセイライティングにおける
語数の時系列推移傾向の把握 — 川口 勇作
- 15 ・現代日本社会におけるベリーダンスの受容と「女性性」
— 『ベリーダンス・ジャパン』にみるダンサーの自己呈示 — 李 旒
- 16 ・D. H. Lawrence の小説と英国労働争議 ストライキのモチーフと語りの変容 — 井上 麻未
- 17 ・NHK テレビ番組における発達障害の語られ方
— 医療化とのかかわりに注目して — 西田 有香子
- 18 ・日本語の関係節の処理に有生性が及ぼす影響
— セルフペーストリーディング実験による日本語母語話者と中国語母語話者との比較を通して — 岡崎 優樹
- 19 ・How Do L1 Loanwords Affect L2 Learning? — Hiromi Matsumoto
- 20 ・韓国人日本語学習者による多義動詞の習得における母語の影響
— 典型性と転移可能性の観点から — 薛 惠善
- 21 ・「おこがましい」「口幅ったい」「差し出がましい」の類義語分析 — 関 ソラ
- 22 ・『天演論』から見た嚴復の政治思想—訳文分析を中心に — 宋 曉煜
- 23 ・「就労者としての外国人」が書いた文章に対する日本語母語話者の評価
— 人事担当経験者と非経験者の比較 — 千葉 月香
- 24 ・Mood Usage and Ideology in a Japanese Newspaper Editorial — XIE Xiaojian
- 25 ・『非情城市』に隠されている女性の声と脱コロニアル記憶 - 音声分析を中心に — 楊 金娣
- 26 ・五四運動における周作人のヒューマニズム思想の内実 - 児童の発見を中心に — 鄭 惠

27 **平成 25 年度認定、修士論文一覧表**

31 **平成 25 年度認定、博士論文一覧表**

32 **2013 年度提出博士論文 選 (要旨)**

- ・『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現 梁 青

「人文系部局の再編と研究科の将来構想」

福田 真人

(国際言語文化研究科 研究科長)



人文学の機能強化という目標

寝耳に水とお叱りを受けるかもしれないが、基本的に平成29年3月31日を以て、わが国際言語文化研究科は消滅することとなった。

消滅するという縁起でもないが、実のところ名古屋大学内で人文学系を統合し、機能強化しようということとなり、国際言語文化研究科と文学研究科の統合・再編成を目指して目下文部科学省に概算要求をしているのである。二部局だけではなく、もっと多くの部局が関わることになるかも知れない。

物事を臆測や恐れや利害のために易々と進めてはならないのであるが、これにはいくつかの理由がある。以下、すこし詳細に述べてみたい。箇条書きの方が分かり易いかもしれない。

(1) なによりも平成25年度に実施された文部科学省の「ミッションの再定義」は大きな意味があった。その書類の最後の欄に、「教育研究組織、およびその規模を見直す」という一文が文科省によって加筆された。これは遅かれ早かれ、改編の指示がくるなど読んだ。

(2) 巷に溢れる噂では、金のかかる理系学問は国立大学法人で行い、金のかからない文系は私立大学で、と言うとんでもない棲み分け理論が霞ヶ関の政界・官界で密かに罷り通っているとか。(実際、国立大学法人評価委員会総会第48回での、「国立大学法人の組織及び業務全般の見直しに関する視点」について(案)で明確に記されている。)

(3) これは名大の問題なのだが、部局が統廃合を繰り返す中で、文系学問、とりわけ人文学の諸分野がいくつかの部局に分かれて所属する事となり、名古屋大学全体で統合すれば日本のみならず世界的にも素晴らしい力量ある部局となると考えられ状況があるということ。

(4) しかし、世の中の不易流行という事と共に、国立大学の使命として、あらゆる学問を網羅的に、しかも高水準で維持しておくということがある。一旦廃止されたり、傍流に追いやられると、それを再興・新規創設するのは困難であることは論を俟たない。

学問の基礎としての人文学

人文学に明るい未来はあるのか、という問いにも、しばしば慄然とさせられる。いまだかつて言語が不要であった時代も国もない。また、人文学が蔑ろにされることはあっても、どのような国、地域においても、文化は重要な財産のひとつである。いわく、歴史、文化、哲学、生活文化、ポップカルチャーなどなど。

哲学の無い文化国家などあり得ない。しかし、一部の人々には、科学と金儲けの事が頭に染み付いて、なかなか根本に立ち還って、考えるのは難しいらしい。科学立国、産業立国がそれらに依って立ったスローガンであろう。文化立国と叫ぶ政治家を寡聞にして知らない。(それはナショナリストチックであることは自ずから違う。)

そもそも人文学とはなにか、という問いかけも近年あまりに耳にしない。あまりに当たり前過ぎて、もう誰も訊かなくなったのだろうか。

しかし、面白い事に、洋の東西を問わず人文学はどうやら劣勢に立たされているらしい。

例えば、ケンブリッジ大学に比してより人文学が強いと考えられて来たオックスフォード大学で、その同窓会誌ともいべき『Oxford Today』が、「危機にある人文学」(The Humanities in Crisis)という特集を組んでいる(Vol. 24 No.1, Michaelmas 2011)。

ここで論じられている様々な点をここで紹介するには紙幅が無いが、それとは別にいくつかの点を指摘する事は可能だろう。

例えば、すぐ言語の無い世界は無い、という点に気付く。言語によってコミュニケー

ションは成り立っているし、そのためにより良いコミュニケーションの方法を探る必要があるのだろう。人文学も社会科学も、その他のすべての科学も、言語無しには、理解も分析も出来まい。歴史の認識無しに、政治を語られても困る。教育を語らずに、経済効率を語られても困惑するばかりだ。

つまるところ、人文学無くしては、何の学問も成り立たない。純粋な式と数値だけで成り立つ学問等ない。それどころか、新しく打ち立てられた学問領域でさえ、すべて人文学の援用無くしては、何も説明できない。つまりすべての基礎に、人文学があるのである。

基本理念に立ち返って

文理融合のかけ声のもと、名古屋大学の中でもあちこちで、文理のコラボレーションが見られ、それなりの成功を収めつつあると聞く。しかし、それで満足してはならず、人文学の中核部分は、何がなんでも、固持し守らなくてはならない。なぜなら、一旦無くせば、それを取り戻すのは至難の業だからである。

今日試みに、経済活動に貢献しない(と考えられている)ギリシャ語学・文学の学問を閉じてみよう。一旦閉じれば、その学問大系の復活は難しい。ホメロスやプラトンを論じるものはもはや誰もいなくなって、そこで終わるからである。たとえ細くとも、その伝統の灯りは受継がなければならない。そこには利益や社会的貢献と言う考えさえ捨象してもよい。考古学もまた、彼らの生きた時代を再現する。

名古屋大学のあちこちに散らばっている人文学の諸領域を集約し、そしてより機能強化を図って、危機にある諸学を救援、支援しよう。それをなし得た時こそ、名古屋大学の、また日本の、人文学における言語と文化を最低限守った意義が発揮されるだろう。その意義が本当に認識されるのが、これからたとえ50年後であったとしても、その貢献は必ずや後世の人々に祝福されるものに違いない。

それ位の尺度と度量で考えてみたいのである。

イベント紹介

国際シンポジウム “American Literature/Culture in a Global Context” (「グローバルな文脈の中でのアメリカ文学 / 文化」)

長畑 明利 (国際多元文化専攻 アメリカ言語文化講座教授)

「名古屋大学アメリカ文学・文化研究会」は、国際言語文化研究科プロジェクト経費の助成を得て、2014年3月5日(水)と6日(木)に、全学教育棟北棟大講義室にて、国際シンポジウム “American Literature/Culture in a Global Context” (「グローバルな文脈の中でのアメリカ文学 / 文化」) を開催した。この国際シンポジウムは、2012年3月開催の “Revisiting the Great Depression in American Literature and Culture” (「大恐慌とアメリカ文学・文化——再訪」)、2013年3月開催の “Race and Ethnicity in American Literature/Culture: A Reconsideration” (「人種・エスニシティーとアメリカ文学・文化——再検討」) に続くものである。

前2回の国際シンポジウム同様、今回の催しも、アメリカ文学・文化に関する特定のトピックの再検討を試みるとともに、名古屋大学と中部地区在住の大学院生および若手研究者(国際言語文化研究科院生および修士生を中心とする)に、英語による研究成果発表の機会を提供し、国内外で活躍できる研究者育成に寄与することを目指すものである。



初日(3月5日)午前は、カリフォルニア大学サンタバーバラ校の Yunte Huang 教授とアイオワ大学の Harry Stecopoulos 准教授による2件の基調講演があった。“Chinese Whispers”(「中国語の囁き / 伝言ゲーム」) という演題で講演されたホアン教授は、変則的な言語特性をめぐると現れる中国語のイメージを紹介しつつ、Ezra

Pound らに影響を与えた Ernest Fenollosa の漢字論、Ferdinand de Saussure のアナグラム論などについて論じた。ステコポロス准教授は、“Indian Knives and Color Lines: Mark Twain, Pauline Hopkins, and the Jim Crow Raj”(「インドのナイフとカラー・ライン——マーク・トゥェイン、ポーリーン・ホプキンズとジム・クロウ版インド統治」) と題した講演で、トゥェインとホプキンズの作品を題材に、19世紀後半から20世紀前半に至る「ジム・クロウ時代」のアメリカにおける人種表象のあり方を、インドおよびインド人表象との関連から論じた。2件の基調講演は、アメリカ文学・文化における人種とエスニシティーに関わる側面を、アメリ



カ外部からの視点を加えて解釈する試みの実践であり、また、数々の有益な知見を提供する刺激的なものであった。

午後は中部地区および日本の他地域からの参加者による7件の報告があった。そこで採り上げられたトピックは、アメリカのいわゆるキャノンの作家である Nathaniel Hawthorne と Henry James、Ernest Hemingway、Carson

McCullers、中国で長く暮らした Pearl S. Buck、20世紀初頭に渡米し、日本人移民の生活を漫画に描いた Henry Kiyama(木山義喬)、韓国系アメリカ人小説家 Chang-rae Lee、そして、21世紀のアジア系アメリカ文化である。

2日目(3月6日)は、前日に続き、午前・午後にわたって、中部地区および日本の他地域からの参加者による研究発表が行われた。具体的トピックは、コミック作品 *Madman*、ブロードウェイ・ミュージカル作品 *Book of Mormon* および *Avenue Q*、テレビ・ドラマ *Ugly Betty*、Gertrude Stein と Alice B. Toklas が雇ったインドシナ出身のcock、モダニズムの詩人 Wallace Stevens、1970年代以後のアメリカ大衆小説に見られる日本表象、そして、アメリカ先住民の神話 “The Woman Who Fell from the Sky” であった。

2日間のプログラムを通じて熱心な討議が行われ、アメリカ文学・文化研究にアメリカ外部の視点を取り入れることの意義について、またその具体的な方法について、有益な意見交換がなされた。

国際シンポジウム「世界と対話する—世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼」(Japan's Dialogue with the World: How the World Sees Japan, How Japan Sees the World)

中村 登志哉

(国際多元文化専攻 メディアプロフェッショナル論講座教授)

国内外の報道機関や企業広報分野で活躍できる人材とメディア研究者の養成を目的に、地元名古屋の報道機関や中部地方の大手企業との社会連携を基に、名古屋大学国際言語文化研究科にメディアプロフェッショナルコースが開設されて、2013年で10周年を迎えた。それを記念して、メディアプロフェッショナル論講座は同年11月8日(金)、名古屋大学文系総合館7階 カンファレンスホールにおいて、「世界と対話する—世界が日本を見る眼・日本が世界を見る眼」と題する国際シンポジウムを開催し、東アジアの国際環境が厳しさを増す中、世界における日本の在り様を研究者・政府・マスコミ・企業の様々な立場から議論した。同シンポジウムの開催には、平成25年度名古屋大学教育奨励費(総長裁量経費)及び国際言語文化研究科プロジェクト経費の助成を得たほか、内閣官房、中日新聞社、トヨタ自動車、名古屋アメリカンセンターからの協力を得た。

日本は長い経済停滞の最中の2011年3月、東日本大震災と福島原発事故に見舞われ、2012年末の政権交代後、安倍首相が主導するアベノミクスが世界の注目を集めるものの、これら二つの災害が日本国民にもたらした物的・精神的被害は今なお完全には回復されていない。加えて、福島原発事故に関しては日本の情報発信力の点で大きな禍根を残した。日本政府が関連情報の公表において、迅速さや正確さを欠いたために、国内外から不信の目を向けられ、国際的イメージが低下し、日本の大手メディアもそれらの政府発表情報の報道において、社会の木鐸としての役割を必ずしも適切に果たさず、国際的に日本のメディアは「官製報道」だとの批判を受けた。このような傷ついた日本のイメージの現状認識、その原因究明と今後への教訓を考察するために、本シンポジウムでは第1部では基調講演「トヨタの国際発信力に学ぶ」で、産業界の企業広報の事例研究を、第2部では「ポスト3.11の日本の国際発信力 政府とメディア」として米国、官邸、報道機関の各立場の発言を得て議論した。

トヨタ自動車の小西工己常務による、同社が米国で経験した大規模なリコール問題等からの信頼回復の鍵は、価値観を明確にした企業理念に基づく国際広報にあったとする第一部の基調講演を受け、第二部では、小野日子・内閣副広報官が「3.11後、日本政府の対外発信力はどう変わったか」と題して、各省庁の連携による英語をはじめとする各国語での情報発信態勢を整え、福島原発事故で傷ついている日本ブランドの再構築に全力を挙げていると、日本政府の国際広報の現状を説明した。



米国のサリバン在名古屋首席領事は、「Is Japan still the most important ally for U.S. in Asia?」と題し、アジアで重要な同盟パートナーである日本は、近隣諸国の理解を得なければ、日米同盟を礎として地域安定へ大きな役割を果たすことができると話した。また、東京新聞の山田哲夫論説主幹は、「ジャーナリズムの転換点としての3.11」と題し、発表情報による福島原発事故報道がマスコミ不信を招いたと指摘し、独自の報道による信頼回復の必要性を強調し、中村登志哉教授は「国際コミュニケーションとしての国家イメージ」と題し、福島原発の汚染水問題が日本の広報外交の阻害要因の一つになっていると指摘、国際原子力機関といった第三者の関与など国際社会での信頼の担保が不可欠と訴えた。

同日開催の10周年記念レセプションでは、講座協力企業の多数参加を得て、中日新聞社の小出宣昭社長が、研究教育で時代の最先端を走り、不断の変革を続けることが同講座の更なる発展につながると今後への期待を示した。



シンポジウムは高い関心呼び、本学教員や学生のほか、メディア関係者はもちろん、一般聴衆を含め約110名が出席した。基調講演は11月19日付中部経済新聞紙上にて「有事の広報対応解説、トヨタ・小西氏 名大で講演」と報道された他、シンポジウムについては11月9日付中日新聞紙上で、「日本の発信力考える 講座開設10周年記念 名大でシンポ」として取り上げられ、本学や本研究科の対外広報に寄与できたのではないかと考えている。

この他、10周年記念事業の一環として、米ボストン大学のトーマス・バーガー(Thomas Berger)准教授を招へいし、国際パブリックレクチャー「Stormy Seas: Japan's Disputes over History and Territory」を11月22日に開催したのをはじめ、計3回の国際パブリックレクチャーを開催した。

愛知県芸術劇場との共同企画「石井漢・石井みどり・蔡瑞月とその時代——日台モダンダンスを拓く」および国際シンポジウム「戦中戦後の身体芸術とメディア—台湾・日本・中国の連鎖」

星野 幸代

(国際多元文化専攻 ジェンダー論講座 准教授)

本企画は、本研究科のプロジェクト経費及び台湾文化省(文科省に当たる)の後援を得て、愛知大学現代中国学会及び蔡瑞月文化基金会の主催で実現した。また企画段階より愛知芸術劇場の賛同を得て、一日目は愛知芸術文化センターで、二日目は本学という共催の形をとることができた。なお、名古屋での二日間を短縮したバージョンで、7月14日、一橋大学でもこれと関連したシンポジウムが行われている。



7月13日 座談会

そもそもの構想は、三、四年前、当時本研究科多元文化専攻の助教であった楊韜先生(現在、佛教大学専任講師)が台北の蔡瑞月文化基金会で取材したことにはじまる。ついで昨年、筆者もともに、同基金会の蕭渥廷理事長と、ドキュメンタリー監督・陳麗貴氏にインタビューした。その成果は、本研究科の学術誌『メディアと社会』第6号(2014年3月)に発表済みである。(星野幸代/楊韜「蔡瑞月文化基金会董事長・蕭渥廷氏およびドキュメンタリー『暗暝の月光:台湾現代舞踏先駆蔡瑞月』監督・陳麗貴氏に聴く」)その後、陳麗貴の知己である愛知大学・黄英哲教授の全面的なサポートがあって、今回の一連のイベントにいたった。

7月12日(土)はドキュメンタリー『暗暝の月光:台湾現代舞踏先駆蔡瑞月』上映、ダンス・デモンストレーション&座談会「石井漢・石井みどり・蔡瑞月とその時代——日台モダンダンスを拓く」を、愛知芸術文化センターのアートスペースAで開催した。座談会では愛知県芸術劇場シニア・プロデューサーの唐津絵理氏の司会のもと、陳監督、蕭理事長、またスペシャル・ゲストとして、戦後69年、蔡瑞月とともに国際的な舞踏プロジェクトに貢献してきた折田克子氏(旭日小綬章)を囲み、日台舞踏交流について話を聞いた。

7月13日(日)は本学文型総合館カンファレンスホールにて、

福田真人研究科長の開会の辞を受け、国際シンポジウム「戦中戦後の身体芸術とメディア—台湾・日本・中国の連鎖」を開催した。シンポジウム報告者には、台湾から四名、中国の蘇州大学から二名、日本国内より二名の研究者を招聘した。筆者の研究対象・蔡瑞月に対するアプローチは、戦時中に日本側プロパガンダの载体にされたという、日本人として甚だ遺憾な歴史的側面からである。日本で現代舞踏の基礎を学んだことは、台湾における白色テロの時代、蔡瑞月にとって迫害の元凶となった。だが、蔡瑞月は日本植民統治の被害者にはとどまる存在ではなく、台湾で独自の現代舞踏の境地を開き、現在その後進が国際的に活躍している。シンポジウムでは、蔡瑞月の夫・雷石楡の大正日本文壇における位置づけ、同時代の劇場空間および流行音楽、蔡瑞月も迫害の対象となった白色テロ



ダンス・デモンストレーション 「あやつり人形参上」 振付・蔡瑞月(1953)

といった、多面的に蔡瑞月の時代を検討する報告があり、続いて活発な総合討論が交わされた。

今回のイベントでは、ドキュメンタリー上映、ダンス・デモンストレーションという、身体/映像メディアとのコラボレーションとして開催でき、学术界に留まらず一般の舞踏愛好家に蔡瑞月をめぐる日台舞踏史を伝えることができた。二日間でのべ130名ほどの聴衆があった。

最後に、シンポジウム開催補助、記録、招聘者アテンドなどで活躍してくれた本研究科D1菅井大地さん、楊金娣さん、胡斯楞さん、M2陸洋さん、M1呉璋琪さん、繁田あずささん、張蕾さん、研究生曹晨さん、劉艶梅さん、于文芳さんに感謝したい。

国際研究集会 「日本における食と災害文化史研究——海外の視点を通して」

伊藤 信博
(国際多元文化専攻 助教)



この研究集会のポスター。発表は、日本語、英語、フランス語の三か国語で実施された。

この国際研究集会は、仏国の権威ある学術雑誌『Géographie et Culture s』(L'Harmattan社)が2012年11月に行った論文の公募「日本における食文化と災害史研究」特集号に論文を投稿し、二度の査読審査を通過した内外の研究者を中心に組織され、2013年度名古屋大学国際会議助成を受けた研究集会であった。

東日本大震災の被害を蒙った日本の現状と、その問題点や対策を、他国の災害との比較検証、さらに日本における過去からの歴史的な災害に鑑み、風評被害にあった食も含め、考察することが目的であった。また、日本における食と災害に関する研究を行っているフランス人研究者が参加することで、その研究を紹介する意義も考慮した集会であった。

その理由は、パリでは「Tsunami」と題した展示会や討論会が2011年に一年を通して行われており、彼らが参加することで、新たな視点や彼らが受けた衝撃を日本人に周知することにも繋がると思ったからである。

また、この研究集会では、過去の様々な災害を研究の俎上に載せ、過去の経験から、災害をどう見つけ、どう克服することが可能なかを討議を通じて、明らかにし、現在の我々の位置を再確認することも目的であった。

この研究会を主催した筆者は、2012～2013年度の名古屋大学総長裁量経費(地域貢献事業)に採択された「過去と未来を繋ぐ地域伝承文化」をテーマに、2012～2013年度の名古屋大学総長裁量経費(地域貢献事業)に採択され、災害時にかつて生産されていた作物を見直すことで、伝統文化の消失を抑止し、地域共同体の再構築や地域振興の発展活動も行っていった。

このテーマも、東日本大震災を契機として、人文学研究者が何らかの形で、我々の研究を地域に生かせないかと始めたことである。そして、この研究集会では、風評被害やTPP関連から、食に関する環境が大きく変化しているため、その点も重要な論点とした。災害克服の歴史的な価値や意義を再認識し、新たな国際的研究視座の獲得を目指したのである。

初日は、災害文化史とテーマを名付け、歴史的観点からの研究を中心に発表が行われた。過去の飢饉の災害記録、安政の大震災、疫病、大正大震災が中心であった。

二日目は、東日本大震災後の食と生産、災害と社会というテーマで、東日本大震災に関連した食と農業、さらに、比較対照するため、インドネシアにおける災害とその復興過程と食、地球規模の農産物と食の危機(地産地消とブランド化)について、発表があり、盛んな議論が行われた。

外国からの参加者は、パリ第4大学、Gilles FUMEY(ジル・フュメ)、フランス国立科学センター、Sylvie GUICHARD-ANGUIS(シルヴィー・ギッシュャー=アングイス)、エクス・マルセイユ大学・地中海社会学センター Jean LAGANE(ジャン・ラガンス)、香港理工大学、Louis AUGUSTIN-JEAN(ルイ・オーグスタン=ジャン)、ブルターニュ・オキシダント大学、Shantala MORLANS(シャントラ・モルラン)氏等である。彼らは、それぞれ、地理学、民俗学、社会学、環境学、文化人類学を専門としている研究者で、普段は、同じ学会で出会うこともない異分野の研究者である。

同様に、日本人参加者も、歴史研究者を含め、近世文学、地理学、社会学、環境学、農政学などの専門家で、本来は、出会う機会がまずない分野の研究者であり、

また、名古屋大学所属研究者も、環境学、文学研究科、教養教育院、国際言語文化研究科と多岐にわたる異分野の研究者で構成され、さらに、東北大学、金沢大学、早稲田大学からも参加があったのである。

さて、その成果としては、初日の「災害文化史」に関する発表者は文学、歴史学、文化史を専門とする研究者であったが、これらの発表に対し、農政学、地理学、文化人類学、社会学を専門とする研究者から、多数の質問、意見があり、時間がかかりオーバーするほど積極的な討議が行われたことが挙げられる。

特に、過去に食されていた飢饉時における食物を地球温暖化に対応して、どのように見直すか、地産地消は室町時代後期には、減少が始まっており、消費地への供給と流通などがどのように行われ、どのような問題が生じたかなどのテーマには、特に多くの質問があり、今後の共同研究が様々な提案された。

また、二日目の「東日本大震災後の食と生産」における発表は、福島の実状などの報告もあり、外国人研究者の危機感と日本人研究者の危機感相互のずれについて、多くの議論が行われた。

さらに、「災害と社会」では、インドネシアの地震後の対応、日本の和歌山における津波災害と伝統的食文化の喪失と復興、そして、地球規模の食の危機についての発表で、活発な議論が時間を大幅にオーバーして行われた。

農政学や地理学、環境学を専門とする日本人研究者からは、「日本における食と災害文化史研究」というこの研究集会のテーマが日本では非常に珍しく、興味深いテーマである、感銘を受けたとの報告もあった。

このような好意的反応から、研究集会終了後、今回の参加者である、地理学、



パリ第4大学
ジル・フュメ教授の発表

農政学を専門とする研究者から、将来にわたって、社会学、文化人類学、歴史学、文学(文化史も含め)を専門とする研究者チームを組織し、今後も定期的に研究集会を行っ

ていくことが提案された。つまり、外国人研究者も含めた分野を横断する国際研究組織の設置を提案されたのである。そこで、今後テーマを食と地産地消や災害研究に絞り、今回参加した研究者も含め、議論を重ねた上で、次回のフランスと日本の二国間科研に我々の研究計画を申請する方向で一致した。

このような成果は、名古屋大学が積極的に、国際的に貢献し、分野を跨ぐ複合的国際研究を推進しようとしていることを示す良い機会であるとの印象を持った。以上から、今回の研究集会に参加した外国人研究者、名古屋大学所属研究者、国内の他大学所属研究者の領域を超えた研究に対する強い意志が示されたことが最大の成果であったと考えている。

なお、2014年12月12日には、この成果を踏まえた国際研究集会を東京の日仏会館で行うことが決定しており、筆者は「室町時代における飢饉」をテーマとして発表する予定となっている。

研究報告

近況報告

文学部から国際言語文化研究科へ、再び文学研究科へ

鬼頭 孝佳

(国際多元文化専攻ジェンダー論講座博士前期課程 2012年度修了)

文学部を卒業する2009年度の秋、文学研究科の博士前期課程の入試に落ちてしまった僕は、これからどうやって生きていこうかな…と途方に暮れていた。この年は自分の「身体」について色々考えさせられた年でもあった。そんな時に偶然出会ったのがこの研究科の修士生だった。この方との雑談の中で、僕が江戸時代の女訓や男色について研究したいと考えていると話すと、自分の指導教員を紹介してくれた。この研究科で、僕の最初の指導教員になってくださった方であり、僕には分不相応な様々な機会も与えてくださった。特にM1の時に『多元文化』への投稿を勧めてくださったことに対して、今も感謝している。

2009年度の初春、文学研究科と国際言語文化研究科の博士前期課程にどちらも合格した。色々思案した末に、この研究科の門を叩いた。思想や歴史は元々好きだったが、当時はただ懐古的に過去を眺めることに対して、疑問が沸いた時期でもあった。教育発達科学研究科の中嶋哲彦先生(教育行政)の講義で、「マイノリティの視点から歴史を綴り直すことが必要だ」という話に触発されたということもあるかもしれない。どういう資料に基づいて歴史を記述するかということよりも、どういう視点から歴史を切り取るかということに関心が向いていた。それ故に、方法的視点としての「ジェンダー論」を体系的に学ぶことに強く心を動かされた。

この研究科では、楽しいことも悲しいことも様々なことを経験した。その中で最も苦しかったのは外国語の学習である。一年に1～2言語ずつ、辞書があれば文献が読めるようになったらいいな…と、様々な言語を勉強した。と同時に、田所光男先生から、哲学を勉強する学生は色々な言語を勉強したい欲求に駆られるけれど、一つの言語に習熟することも大切だよとアドバイスを受け、英語の習熟に費やした時間も大きい。(もともと、今も「得意」ではない)。しかし、今振り返ってみると、発表や研究の幅が広がったような気がしている。実際、今年度はwell-being in Asiaのシンポジウムにて、英語で発表する機会を頂いた。

体調不良も続いて中退して就職することも考えたが、最終的に3年かけて修了した。授業を採っていた古田香織先生や新井美佐子先生に体調を気遣って頂いたこともあったし、松本伊瑛子先生にはお昼を御一緒しながら、色々な悩みを聞いて頂いた。修士論文の審査には指導教員である星野幸代先生から、「女訓を研究すること自体には価値がある」というコメントを頂いて背中を後押しして頂き、その後比較文学会中部支部の発表会で報告をする機会も紹介して頂いた。前野みち子先生には、「色んなことに興味があるのは

よく分かったが、その関心を繋ぐ軸が弱いし、深く掘り下げられていない」という宿題を頂いた。報告を兼ねて前野先生の研究室を訪ねられないでいるのは、まだ関心が拡散してしまっているからだと思う。発表準備や論文執筆の際に必ず頭をよぎるアドバイスであり、昨年度はジェンダーとは直結しない対象とする時代の法制度や政治、経済の基礎的な知識について勉強し直すことに大半の時間を割いた。

関心が拡散してしまうという話で思い出すのが布施哲先生の「寄り道をしながら研究してってください」という言葉である。「思慮深い研究ノート」が研究ノートを脱却できるよう、ひたすら書いている。前野先生の「関心の収斂」が一つの具体的な論文や発表に関わるアドバイスだとしたら、布施先生のアドバイスは研究関心を閉ざさないための長期的なアドバイスであると受け止めている。昨年度は名大では取得できない司書資格を得るため、愛知学院大学で講習会に参加した。また、昨年度から、知人の紹介で予備校の講師や博物館の学芸員の「副業」も始め、結果的にその仕事と研究の時間の確保、体調との兼ね合いに悩むことになっている。

寄り道と言えば、博士論文には直結しない共同研究も行っている。一つは『尾張名家誌』という儒学者の伝記の輪読会であり、一つは名古屋女子大学でエコフェミニズムに関する研究会に参加している。また、伊藤信博先生や文学研究科の阿部泰郎先生が主催される物語資料に関する研究会にも参加させて頂いている。特に伊藤信博先生からは文化の繋がりの中で資料を読むということと、資料自体の語りに耳を傾けることの大切さを学んだ。文学研究科に戻ったのは、もう一度資料自体に向き合うことが必要だと判断したからである。

慢性的な体調不良を抱えながらも今日まで歩いてこれたのは、この研究科を初め、ここには名前を挙げきれない諸先生方や同期、友人の皆さんのお力添えがあってこそと痛感する。今、僕が何をしているのか、気に掛けてくださっているという声を人づてに聞き、この文章を執筆させて頂いた次第である。

Overview of PISA 2012 Results and Japanese Educational Goals: Foundation for the Development of Curriculum Connecting Design Education and English Communication (Speaking, Listening, and Writing)

Meagan Kaiser¹ Osamu Sahara²

(1 南山大学 総合政策学部 2 国際言語文化研究科メディアプロフェッショナルコース博士後期課程 2012年度 満期退学、名古屋文理大学)

In order to consider how to meet 21st century student needs, it is important to better understand our future university students and also to understand the most recent goals set out by the education ministry for helping Japanese students to achieve their full potential. One helpful measure, the 2012 PISA results, indicate that the current Ministry of Education (MEXT) approach to education has been quite successful, both academically and in terms of developing skilled problem solvers and critical thinkers. But even with high scores, naturally there are areas in which improvement can still be made. For Japan, those areas at present appear to be strongly related to student confidence and motivation. As it relates to learning environment, PISA 2012 indicated that Japanese students, while academically high-ranking, are still significantly below the norm when compared with other OECD nations' students' perceptions of their abilities regarding the following topics:

- (1) belief in one's own ability to quickly understand
- (2) willingness to seek explanations
- (3) belief in one's ability to handle large amounts of information
- (4) belief in one's ability to easily link facts together
- (5) desire to take on the challenge of solving complex problems

OECD data identifies a positive correlation between student perceptions of ability and self-motivation with actual success. Correlation is not causation. However, the students' low opinion of their own abilities is troubling for a variety of reasons beyond test scores alone. It is easy to understand that we should work to build students' perception of themselves as competent learners and should strive to cultivate a spirit of engagement and ownership in each student's learning.

MEXT seems to have identified this need even before the 2012 results were published. Despite noteworthy performance on PISA, Japan took the initiative to institute policy reforms starting in 2008, which aimed to offer more equitable opportunities to children across Japan and a curriculum that would meet the needs of Japanese citizens in the 21st century. The latest revisions to educational policy, implemented fully across Japan by 2012, have clearly stated that we are to ensure

not only that children acquire basic fundamental knowledge and skills, but that students should also learn how to think deeply and broadly, make well considered decisions, and learn how to express themselves fully.

It is clear from this data that future curriculum development at all levels, including university, should put an emphasis on scaffolded development of higher order thinking skills and should include activities designed to both challenge and promote confidence and resiliency in students.

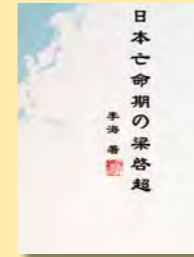
To that end, it is our hypothesis that developing a class setting in which students would have the opportunity to create tangible, internationally shareable content would potentially be a very good environment which provides challenge while at the same time nurtures confidence and resiliency. Development of design skills, we believe, will help students to more clearly identify challenges and see their own growth. English communication skills will help them to find a voice on a worldwide platform.

With these ideas in mind, after much discussion, we think that a combination of web-design, video creation and English communication would be a good fit for working toward the MEXT goals described in this paper. We are hoping therefore to experimentally merge our existing Media English (blog making, basic video creation and online response) and design curriculums into one course and to continue this research into the future.

References

OECD. (n.d.). Programme for International Student Assessment (PISA) Results from PISA 2012 Problem Solving. Retrieved from <http://www.oecd.org/pisa/keyfindings/PISA-2012-PS-results-eng-JAPAN.pdf>

OECD (2013). PISA 2012 Results: Ready to Learn: Students' Engagement, Drive and Self-Beliefs (Volume III), PISA, OECD Publishing. <http://dx.doi.org/10.1787/9789264201170-en>



『日本亡命期の梁啓超』
(桜美林大学北東アジア総合研究所、2014年)

李海著

(国際多元文化専攻、博士後期課程 2014 年修了、香港衛星テレビ東京支局特派員)

本書は梁啓超の日本亡命期における文筆活動を中心に、日本を媒体とした西洋文明の受容の状況について二部に分けて論じ、2014年3月名古屋大学国際言語文化研究科に提出した博士論文を基に刊行されたものである。

第一部では、渡日時の梁啓超が直面した問題とその解決法について考察した。日本に亡命した梁啓超にとって、西洋文明を受け入れるには、まず日本語の習得が必要とされた。来日してまもなくの梁啓超が直面した問題は、いかに早い段階で日本語を修得するかであった。そこで、彼は『和文漢読法』を世に広めた。

これまで日本人による『和文漢読法』の評価はなかったと先行研究の結論について、筆者は関連資料を調べたところ、『和文漢読法』の発売当時書かれた日本人による評価文を発見した。梁啓超の創立した東亜商業学校の日本人教師船津輪助がこれまで発見された最も古い版の『和文漢読法』を収蔵していた。それだけではなく、船津輪助は中国人に対する日本語教育の現場で『和文漢読法』を使用していたことも重要である。また、船津は実践的な観点から『和文漢読法』を評釈しており、漢字語習得の難しさに理解を示し、『和文漢読法』が清国人の日本語学習に効果があると証言している。

第二章では、梁啓超と天野為之の間でなされた著作権問題についての交渉を中心に検討した。梁啓超の著作権論をめぐっては、これまでは「梁啓超は著作権制度に賛成していた」という李明山氏の見解があったが、筆者はこれに疑義を感じ、考察を行った結果、梁啓超は天野為之が唱えた「清国知識人を啓蒙するために日清共同で洋書翻訳を行う旨の著作権制度論に賛同したが、天野が日本の東アジア制覇を側面支援するかのような著作権制度論を訴えると、これを激しく非難する方向へと改めた、との結論に至った。

第二部では、梁啓超自身が西洋思想をいかに受容していったかを明らかにすることを試みたものである。これまであまり注目されてこなかった梁啓超の訳詩と日本詩壇の関連、及び梁啓超の音楽教育思想と明治期の日本唱歌の関係を考察した。

第三章では梁啓超が訳したバイロンの名詩 The Isles of Greece と日本人との関連を解明した。筆者は「梁啓超の訳は日本語訳からの重訳だ」という魯迅の推測にヒントを得て、明治期日本のバイロン作品の関係資料の中から、木村鷹太郎の作品『文界之大魔王』に「哀希臘」という訳詩を見つけた。そし

て両訳を比較検討した結果、梁啓超は木村鷹太郎のこの訳詩を参照したことが判明したのである。

木村鷹太郎の訳詩の存在が確認されたことで梁啓超の訳詩と比較することができ、梁啓超が単に木村訳を参照しただけではなく、だいた書き直したことも明らかとなった。梁啓超は木村の作品中の「哀希臘」に注目し、その詩に含まれた「奴隷性から脱却、「国民の自立が国家の独立へとつながる」という思想性の存在を読み取り、それを訳した。

梁啓超の訳詩についての分析からわかるように、彼の西洋受容の独自性は詩の芸術性を捨象し、その精神性を重視したところにある。同様に、音楽教育の面でもこの傾向が見られる。彼が作詞した学校唱歌には日本の旋律が取り入れられ、歌詞には中国人に欠けていた愛国心や尚武の精神を付与し、音楽教育における徳性の涵養を重視している点が特徴的である。梁啓超は音楽と国民性の涵養を結びつけ、国民の尚武精神の養成には軍歌がふさわしいとして着目した。

本書では、具体的には、梁啓超作詞の唱歌「黄帝」が日本の唱歌といかなる関係にあるかを考察した。梁啓超の音楽作品創作における「黄帝」と日本の学校唱歌「皇御国」の比較を中心に、どの点を受容したかを検討した結果、梁啓超が作詞中で「皇御国」とは異なる表現手法を用いており、修辭の独自性、国民国家の建設における思想の啓蒙性を音楽という表現形式を通じて示していることが明らかになった。

梁啓超は14年間にも及ぶ亡命生活を日本で送った。その経歴からして日本との関係が極めて深かったが、今日までの梁啓超と日本の関連をめぐる研究はその実態に沿うものとは言えなかった。本書は社会環境と個人の主観的能動性に注目し、彼の日本語教育観、著作権論、訳詩、音楽(作詞)など多方面に論考の範囲を広げ、より立体的な梁啓超像を築きあげようと試みたものである。これによって得られた結論では、梁啓超の西洋思想の受容においては、日本からの影響が確実にあったが、日本側が果たした役割を過大に評価してはならない。彼自身の主観性と中国文学の素養がより大きな役割を果たしたことを見逃してはならない。梁啓超、日本、西洋の三者の関係で言うと、日本側は素材、題材の提供を中心に役割を果たしたことにとどまり、梁啓超自身は受容した西洋の思想を、中国の現状を十分に考慮した上で、彼の考える中国の近代化に適合するような思想に再構成したのである。

2014年度オープンキャンパス・ポスター発表

菅井大地	・Richard Brautiganの作品における自然描写
路浩宇	・補語の使用に見られる不均衡な現象について—中国語の受身文の場合—
市村葉子	・自然会話における「んだ(の)」の語用論的機能 — 共起表現と前接する品詞に注目して—
川口勇作	・ポアソン分布および線形回帰モデルとの比較から見る エッセイライティングにおける語数の時系列推移傾向の把握
李旻	・現代日本社会におけるベリーダンスの受容と「女性性」 —『ベリーダンス・ジャパン』にみるダンサーの自己呈示—
井上麻未	・D. H. Lawrenceの小説と英国労働争議 ストライキのモチーフと語りの変容
西田有香子	・NHKテレビ番組における発達障害の語られ方 —医療化とのかかわりに注目して—
岡崎優樹	・日本語の関係節の処理に有生性が及ぼす影響 —セルフペーストリーディング実験による日本語母語話者と中国語母語話者との比較を通して—
Hiroki Matsumoto	・How Do L1 Loanwords Affect L2 Learning?
薛惠善	・韓国人日本語学習者による多義動詞の習得における母語の影響 —典型性と転移可能性の観点から—
関ソラ	・「おこがましい」「口幅ったい」「差し出がましい」の類義語分析
宋暁煜	・『天演論』から見た嚴復の政治思想—訳文分析を中心に—
千葉月香	・「就労者としての外国人」が書いた文章に対する日本語母語話者の評価 —人事担当経験者と非経験者の比較—
XIE Xiaojian	・Mood Usage and Ideology in a Japanese Newspaper Editorial
楊金娣	・『非情城市』に隠されている女性の声と脱コロニアル記憶 —音声分析を中心に—
鄭惠	・五四運動における周作人のヒューマニズム思想の内実 —児童の発見を中心に—

Richard Brautiganの作品における自然描写

国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 D1 菅井大地



Richard Brautigan (1935-1984)

1960-70年代にかけて西海岸で活躍したアメリカの作家。50年代の「ビート」から60年代後半の「ヒップ」への文化的転換期の作家とされる。60年代に出版された三小説は、牧歌的要素を多分に含み、幻想的な世界を構築している。そのため、理想と現実の間隙を描き出す作品であると解釈されている。主要作品に*A Confederate General from Big Sur* (1964), *Trout Fishing in America* (1967), *In Watermelon Sugar* (1968), *The Tokyo-Montana Express* (1980)など。

1. 初期三小説

・ *A Confederate General from Big Sur*

語り手のJesseと、その友人Lee MellonのBig Surにおける生活を描く作品。物質的に豊かな都市を離れて、自然の中へと逃避しようとする姿勢が描写される。

・ *Trout Fishing in America*

幼少期の鱒釣り体験、及び家族での旅行などが基になっている。ストーリー性は希薄で、断片的な章によって構成される。

・ *In Watermelon Sugar*

iDEATHというユートピア的共同体が描かれる。牧歌的な生活を営む共同体と、Forgotten Worksと呼ばれる荒地が対照的に描写される。

2. 先行研究



牧歌的で幻想的な世界を構築するBrautiganの作品は、物質的に豊かな都市からの逃避の姿勢が描かれている。更に、牧歌的理想と、現実のアメリカ社会とのギャップを描いた作品であると指摘されている。(Terence Malleyなど)

3. アメリカン・パストラル



・パストラル(pastoral)とは文学作品においては、田園生活や羊飼いの生活などを理想化した形で描写される。(Oxford English Dictionary)

アメリカ文学においては、都市や文明を否定し、自然に逃げ込もうとする様が描かれる(Buell)。しかし、荒野を開拓し、人間が満足に暮らせるよう自然を作り替えることで、楽園を構築しようとする思想が根底にある(Marx)。

4. 消費対象としての自然



1960年代のアメリカでは、多くの人が狩りや釣り、またはキャンプなど、自然の中で余暇を楽しんだとされる(Farber & Bailey)。自然を求めて森に入っても、すでにそこは人で溢れている様子が*Trout Fishing in America*の中で描写される。

5. 切り売りされる自然

“We’re selling the waterfalls separately of course, and trees and birds, flowers, grass and ferns we’re also selling extra. The insects we’re giving away free with a minimum purchase of ten feet of stream.”

(*Trout Fishing in America* 139-140)

鱒の泳ぐ川、木、花などの自然が、“Cleveland Wrecking Yard”で切り売りされている様が描かれる。

6. 自然への逃避≠都市からの解放

Brautiganの作品においては、都市から牧歌的な世界への逃避を描くものの、都市の秩序から完全に自由になることは無い。*A Confederate General from Big Sur*においては、資本主義を象徴するJohnstonという男がBig Surに入り込み、Jesseの心を乱す。更に*In Watermelon Sugar*において、牧歌的なiDEATHはinBOILによって「絵空事」だと糾弾される。Brautiganは、パストラルの理想と現実のギャップを描いたのではなく、パストラルは資本主義的秩序から解放されることはないということを描いたのではないだろうか。

7. 今後の課題

Brautiganの作品は、資本主義的秩序から逃れられる「場所」は既に存在しないことを示唆していると考えられる。都市から逃避するための「場所」としての自然は既に無く、都市と自然の境界は曖昧なものになっているのではなからうか。今後は「場所の感覚」をキーワードとして他の作品についても考察を続けたい。

参考文献

- Brautigan, Richard. *Trout Fishing in America*. 1967. London: Vintage, 1997. Print.
 Buell, Lawrence. “American Pastoral Ideology Reappraised.” *American Literary History* 1.1 (1989): 1-29. JSTORE. Web. 17 July 2013.
 Farber, David, and Beth Bailey. *The Columbia Guide to America in the 1960s*. New York: Columbia UP, 2001. Print.
 Hjortsberg, William. *Jubilee Hitchhiker: The Life and Times of Richard Brautigan*. Berkeley: Counterpoint, 2012. Print.
 Malley, Terence. *Richard Brautigan*. New York: Warner, 1972. Print.
 Marx, Leo. *The Machine in the Garden: Technology and the Pastoral Ideal in America*. 1964. New York: Oxford UP, 1981. Print.

補語の使用に見られる不均衡な現象について —中国語の受身文の場合—

名古屋大学 国際言語文化研究科 多元文化専攻 D2 路浩宇 2014.7.5

1.問題提起:受身文に見られる補語の使用に関する不均衡な現象とは?

- (1) a房子被拆了。
b*房子被盖了。
b' 房子被盖<好>了。

受身文では、すべての述語動詞が補語を伴うというわけではない。アスペクト辞「了」だけあれば成立する受身文も存在すれば、補語が付加されないと成立しない受身文も存在する。

- (2) a椅子让小王拉倒了。(木村1992)
b* 椅子让小王拉了。

(2a)のVP(“拉倒”)は、対象に直接働きかける積極的な行為を示す動詞“拉”と、その働きかけの結果として対象(“椅子”)が被る変化を示す“倒”が結び付いた、他動性の高い「動詞+結果補語」(VR構造)からなっている。このVPから結果補語の“倒”を落とした(2b)は明らかに不自然である。

2.先行研究:

補語は中国語受身文の成立に重要な文成分である。木村(1992)、黄伯荣・廖序东(2003)、杉村(2004)

3.問題点:

先行研究では補語の受身文の成立に対する重要性が指摘されているが、補語と述語動詞の意味的特徴との関係がまだはっきりされていない。

4.本発表の立場:

本発表は先行研究を踏まえ、「処分義」と「獲得義」を表す動詞が用いられる受身文を研究对象として、受身文の成立に補語が付加されなければならない場合と「了」があれば成立する場合に分けて、補語の使用に見られる不均衡な現象について検討を行う。

5.考察

- “拆” “盖”
(4) a房子被拆了。(再掲例(1))
b* 房子被盖了。
b' 房子被盖<好>了。

“拆”: 組立てられているものや組織をばらばらにして、全体の形やまとまりをなくすことを示す。
“盖”: 建物を造ることを表す。
対比: 建物を解体する際、壁や屋根等が自然に倒れる場合があるが、それに対して建物を建てる際には、デザインやコンクリートの注入など人間が意識的に様々な作業を行わなければならない。解体工事よりも建設工事が多くの労力を必要とするのは明らかである。

- “扔” “捡”
(3) a我送给他的钢笔被他扔了。
b* 我丢掉的钢笔被他捡了。
b' 我丢掉的钢笔被他捡<到>了。

“扔”: 物を処分する動作を表す。この動作の実行によって持っていたものが手から離脱して重力方向に沿って自然に落下するという結果が含まれている。
“捡”: “扔”と反対に、動作主が重力の作用を克服して、落ちていた物を取る動作を表し、獲得義を有している。

6.結論

「獲得義」を表す動詞の意味的特徴:
(例: “捡”、“盖”、“织”、“印”等):
・事物の「獲得(努力や苦心の末に)手に入れること」を表す。
・事物に働きかける過程しか表さず、これだけでは動作が完了する境界を表すことはない。
・「動作性」を有するが、「結果性」を有しない動詞に属する。
・「動作性」を有しているのみなので、補語が付加されなければ受身文の述語とはなりにくい。

「処分義」を表す動詞の意味的特徴:
(例: “扔”、“拆”、“撕”、“拔”等):
・処分(不要なものや余分なものを適当な方法で始末すること)を表す。
・事物を離散させる意味を有する。
・「動作性」+「結果性」を有する動詞に属する。
・「動作性」と「結果性」を有しているため、受身文での受容性が強く、完了を表す“了”さえあれば受身文の述語となる。

主要参考文献:
木村英司1992『BEI受身文の意味と構造』、『中国語』第6号pp.10-15. 内山書店。
杉村正文2004『中国語の受身文』、『次世代の言語研究』、筑波大学現代言語学研究会編、pp.29-43。
黄伯荣・廖序东2003『现代汉语』(下)、高等教育出版社。

自然会話における「んだ(の)」の語用論的機能 — 共起表現と前接する品詞に注目して —

国際言語文化研究科 日本語文化専攻 応用言語学講座 博士後期課程2年
市村 葉子 (ichiyo0307@gmail.com)

研究背景

- 「んだ」の用法 (i) 説明のノダ (1) 僕、明日は来ないよ。用事があるんだ。(野田1997:64)
(ii) 発見のノダ (2) 山田さんが来ないなあ。きっと用事があるんだ。(野田1997:64)
(iii) 質問のノダ (3) どうしたんだ、いったい。(野田1997:118)

対事的(本発表の「発見のノダ」に相当)「のだ」は「の」「んです」と言った形はとりにくい。対人的(「説明のノダ」に相当)「のだ」は「の」「んです」も自然にとることができる。(野田1997:65) ⇒つまり、「んだ」はいずれの「ノダ」にも使用される? しかし、コーパス調査(BTSJコーパス)によると、「んだ(の)」は主に(ii)の使用が多く、(i)(iii)は「の(の)」「んだよ」,(iii)は「の(の)」などが好まれる。(市村・堀江(2013))

⇒ 実際の会話において「んだ(の)」はどのような場面で使用されているのか??

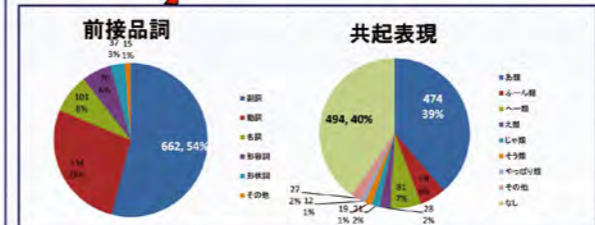
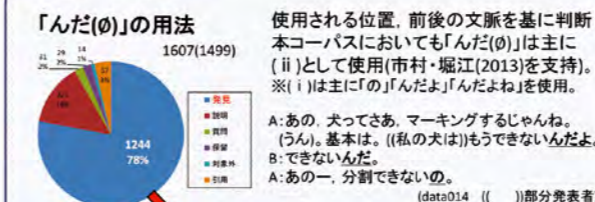
研究課題

- (a) 他コーパスにおいても市村・堀江(2013)と同様の結果が得られるのか。
- (b) 「んだ(の)」はどのような表現、品詞と共起し、自然会話においてどのような語用論的機能を担っているのか。

調査方法

調査資料: 名大コーパス129会話全てを対象(2~4名の雑談約100時間10代~90代 男性37名, 女性161名)
調査手順: (I) (ii)の「んだ(の)」を抽出 (II) 共起表現、前接品詞を分析 (III) 「んだ(の)」の語用論的機能の考察

調査結果



※ 前接品詞は「副詞(そう類)」が662例(全体の5割)観察。その他の品詞において「相手の発話の一部繰返し」136例「驚き表示」(森山1989:79)「あ(っ)」「ふーん」等と高頻度で共起。
A: こっからどれぐらい?
B: こっから一、え、40分で着けると思うけど。
A: あ、ほんと。(うん) そうなんだ。(data002)
※ 「んだよ」は、説明のノダが622例で、「んだ(の)」の約3倍、「んだよね」は情報提供(「説明」場面)の使用が307例観察。

考察

- ❖ 自然会話では「んだ(の)」は主に発見の用法として使用。当該の「だ」はその言語行為が意図的に断定されるものであることを伝える**断定の標識**(メイナード2005:344)ではなく、「話の現場で主体が経験している心理状況や内面的な経験をそのまま表現するときに、その指標(メイナード2000:197)」として使われる。
- ❖ 「そう」類、または相手発話の一部繰返しに後接することから、**新たな局面へと積極的に働きかけるのではなく、間接的にその展開を支える機能を持つ。**
- ❖ 「んだ(の)」と「の(の)」は「のだ」の変異体であるが、実際には機能分担している可能性。「んだ(の)」を「の(の)」と同じような環境で使用するためには、「よ(ね)」等の文末詞が必要。
⇒ 今後さらにこれらの形式を比較、分析・考察。

【主要参考文献】
市村葉子・堀江(2013)「の(だ)文を用いた日本語母語話者の伝達方略—話し言葉コーパスの分析に基づいて—」第16回日本語学学会年次大会発表資料、メイナード・K・泉子(2000)「だ」文と「じゃない」文、『情意の言語学—「場交渉論」と日本語表現のトース—』くろしお出版、189-220。
森山卓郎(1989)「応答と談話管理システム」『阪大日本語研究』1号、大阪大学文学部日本学科、63-88。
野田春美(1997)「の(だ)の機能」(Frontier series 日本語研究叢書9)くろしお出版。

ポアソン分布および線形回帰モデルとの比較から見る エッセイライティングにおける語数の時系列推移傾向の把握

国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 アメリカ言語文化講座 D1
川口 勇作

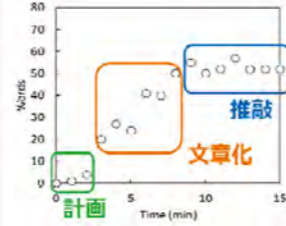
研究目的

語数の時系列推移を可視化し、その傾向を各種分布との比較から把握する

研究背景

> L2ライティング研究の知見

- 優れた書き手ほどエッセイライティングにおけるサブプロセス（計画・文章化・推敲）が明確（Roca de Larios et al., 2008; Stevenson, 2006）



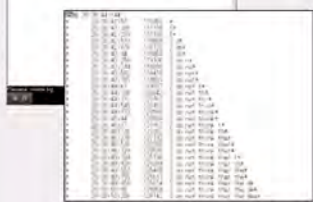
- サブプロセスが明確なプロセスは**ポアソン分布**に近似？
- 明確なサブプロセスのない**線形**を描くプロセスの存在

> 研究手法の精緻化

- L2ライティング研究において**キー入力記録システム**を採用する試み
- ライティングプロセス記録ソフトウェア **WritingMaetriX**の開発（草薙・阿部・福田・川口, 2013）

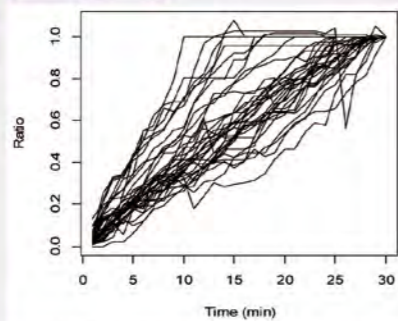
WritingMaetriX

テキストエディタ様のUI上でライティングを行い、キーの打鍵と時間を記録

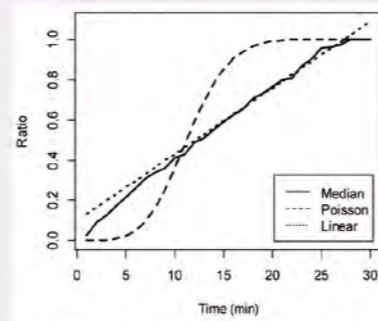


このような形式でライティングプロセスデータが記録される

結果



全協力者の増加語数の時系列推移データを可視化したグラフ



全協力者の代表値と線形回帰モデルおよびポアソン分布

調査

> 調査協力者

- 大学学部生 (n = 35)
- 平均TOEFLスコア: 488.03 (SD = 44.60)

> 手順

- エッセイライティング (30分)
- プロンプト: 「科学技術は世界を住みよくしたか？」
 - TOEFLライティングセクションから出題
- ライティングプロセス記録ソフトウェア **WritingMaetriX**を使用
 - 増加語数の時系列推移を記録

> 分析

- 増加語数の時系列推移データの中央値を图示
- 増加語数の時系列推移データを**ポアソン分布・線形回帰モデル**に当てはめて得られた理論値を中央値と併せて图示

結論・今後の展望

- 先行研究の知見と反し、本研究の協力者のライティングプロセスは**明確なサブプロセスを描かない傾向**
- 近似する分布（線形回帰モデル・ポアソン分布）への当てはまりのよさとエッセイ評定との関係の検討
- 当てはめの際に得られる値を用いた、ライティングプロセス評価指標の開発

参考文献

- 草薙邦広・阿部大輔・福田純也・川口勇作 (2013) 「キー入力記録システムを採用したライティングプロセスの可視化: 自律的学習を促すフィードバック環境構築に向けて」 第81回外国語教育メディア学会中部支部春季研究大会. 東海学園大学.
- Roca de Larios, J., Manchón, R., Murphy, L., & Marin, J. (2008). The foreign language writer's strategic behaviour in the allocation of time to writing processes. *Journal of Second Language Writing*, 17, 30-47.
- Stevenson, M., Schoonen, R., & de Glopper, K. (2006). Revising in two languages: A multi-dimensional comparison of online writing revision in L1 and FL. *Journal of Second Language Writing*, 15, 201-233.

現代日本社会におけるベリーダンスの受容と「女性性」



『ベリーダンス・ジャパン』にみるダンサーの自己呈示

名古屋大学 国際言語文化研究科 国際多元文化専攻

先端文化論講座 博士後期課程一年 李 旻



研究の背景

- 作品の増加(図1参照)
- イベント・ショーの一般化
- 専門誌の創刊(2007年)

- 砂漠などの異国趣味
- 『アラビアン・ナイト』
- 官能的な女性像

- 海外では学問的な研究 ⇒ ややあり
- 日本では学問的な研究 ⇒ 殆どなし
- 一般的な記述・インタビュー ⇒ あり

ベリーダンス・ブーム

ベリーダンスの連想

ベリーダンスの研究

研究の目的

- 日本におけるベリーダンスの受容 ⇒ 明確化
- 日本人女性は、ベリーダンスを踊る理由 ⇒ 探求
- 日本におけるベリーダンスの特徴・ベリーダンスにまつわる様々な女性性 ⇒ 解明

研究の内容

ベリーダンスの受容

- 中東の民族舞踊
- オリエンタリズム
- 西洋の官能的なベリーダンス
- 女性解放運動
- 官能的な踊り
- 「女性のための踊り」
- グローバル化・高度成長期
- 日本の「女性だけの踊り」

女性だけの踊り

- 女性だけの表紙
- ダンサー一人、観客不在
- 自分を楽しむ
- 女性だけのスタジオ
- 男性排除
- 「女性だけの踊り」の特徴
- 社会の側の束縛からトリップ

女性性の呈示

- ベリーダンス・スタジオ
- レッスンウェア・動き
- 鏡の中の自分に自己呈示
- イベント・ステージ
- コスチューム・踊り
- 観客に自己呈示
- 幻想的雰囲気体験
- 自分の感情を重視
- 社会的な女性性を中和

研究の進捗

- 中東の文脈から離れ、アメリカから「女性のための踊り」を受容する流れである。
- 『ベリーダンス・ジャパン』においては、「女性だけの踊り」という特徴が明らかである。
- ダンサーの自己呈示は、日常生活の中で行なわれる社会的な女性性を中和する過程である。

主要参考文献

- 『ベリーダンス・ジャパン』(Vol.01~Vol.24)イカロス出版社. 2007年~2013年.
- エドワード・W・サイード『オリエンタリズム』(上)坂垣雄三・杉田英明監修 今沢紀子訳 平凡社. 2003年.
- アービング・ゴッフマン『行為と演技—日常生活における自己呈示』石黒毅訳 誠信書房. 1974年.
- Anthony Shay/Barbara Sellers-Young. *Belly Dance: Orientalism, Transnationalism, and Harem Fantasy*. Mazda Pub. 2005.



図1 岡野玲子・辛酸なめ子・俵田来未の作品



図2 ベリーダンス・スタジオ内の様子

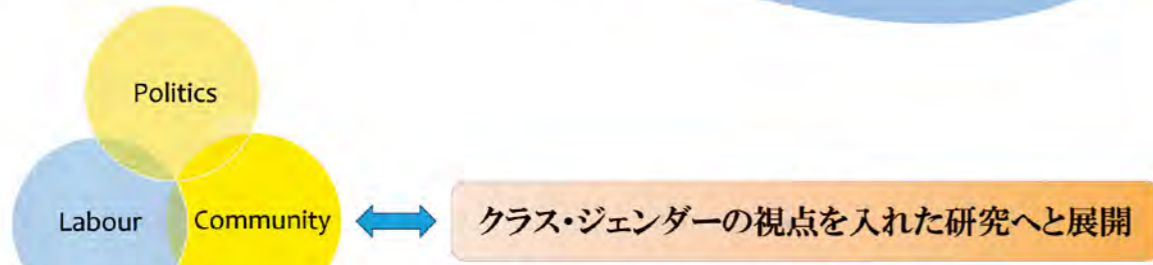


図2 ベリーダンス・イベントのステージ内の様子

D.H. Lawrenceの小説と英国労働争議 ストライキのモチーフと語りの変容

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科ヨーロッパ言語文化講座 博士後期課程1年 井上麻未

1. 炭鉱争議の再定義——英国の労働争議の歴史研究



1911年には英国の炭鉱労働者は100万人を超え、MFGB (英国炭鉱労働者連合) は世界最大の労働組合に成長を遂げた。炭鉱労働争議の歴史研究は、産業の衰退と共に一旦は縮小の傾向にあったが、1990年代後半以降はクラス・ジェンダーの視点を入れた研究へと展開した。現在は 'community, family, gender relations' の観点からの研究が進み、炭鉱労働争議とは英国社会全体が抱える問題が集約されたものであったという、その本質が明らかにされてきた。

2. ロレンスの作品のストライキのモチーフ——終わりなき階級闘争



労働争議のモチーフは、ロレンスの初期、中期、後期の作品の中で反復・変奏される。従来、『チャタレー卿夫人の恋人』では階級闘争のテーマは消滅していると論じられてきたが、実は Chatterley Novels の3つのヴァージョンにおいて、労働争議のモチーフは階級闘争のモチーフと重なり合い、改変を重ねるにつれイデオロギー性の濃厚なものに変化している。

3. 再定義に立脚したモチーフの分析

初期の「ストライキの物語」では、当時の小説にみられる夫婦関係や男女関係とは異なる力関係が描かれていることがわかる。夫婦のイーストミッドランド地方の方言での会話が物語の中心に位置するこれらの写実的な作品を分析すると、sexuality ではなく、実は炭鉱コミュニティの成員としての男女の役割がその関係性を左右していることが明らかになる。これ以降、ロレンスはコミュニティの内側からストライキを描くことはなくなるが、ストライキのモチーフは変奏され、やがて個々人の階級間の争いから社会全体を覆う階級闘争へと変化する。上記の小説の語りを分析することで、作品を追うごとに階級間の激しい闘争へとイデオロギー性を増していくストライキの言説が、どのような語りの技法によって形づくられていったかを明らかにし、ロレンス独自の小説の技法を析出してゆく。



D.H. Lawrence 1885-1930

NHKテレビ番組における発達障害の語られ方 —医療化とのかかわりに注目して—

国際言語文化研究科 国際多元文化専攻 多元文化論講座 博士後期課程 西田有香子

1. 研究の動機



最初の疑問

「落ちつきがない」とか「電話をしながらメモがとれない」ことについて最近「発達障害」と言われることがあるけど… 個人の病気の問題と切り切れるのかな？

2. 仮説

・特定の特徴の医療化に結びつきうる語りがNHKテレビでなされているのではないかと。

3. 医療化とは

・これまで非医療的問題と考えられていた事柄が医療的問題と捉えられるようになるという変化が起きること。

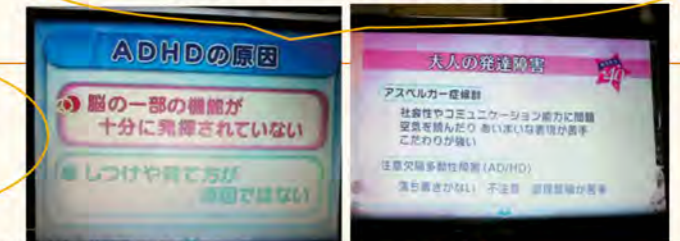
4. 研究目的

・発達障害を扱うNHKテレビ番組55本(1995年から2012年6月にかけて放送されたもの)の分析を行い、語りのありようを明らかにする。
・特に、医療化に結びつきうる語りがなされているか、いかになされているかに注目する。



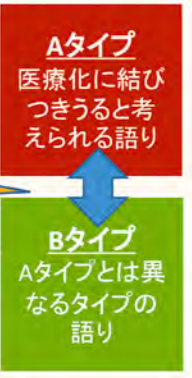
このテロップ入りの画像はインパクトがある！

情報をまとめたパネルが用いられることも多い



5. 分析結果

- 1) 特定の特徴を発達障害概念と結びつける語りが多数見られる。
- 2) 本人の性格や育て方のせいではなく、原因は脳機能の障害であるとする語りが多く見られる。
- 3) 「実は発達障害」とか「発達障害があると分かる」という表現が多く見られる。
- 4) 特徴を病理的問題と捉えることに対してためらいや問題意識が示されることがある。
- 5) 現代日本社会の慣習や支配的価値観に対する問題意識が表明されることが多々ある。
- 6) 医療化批判が主題となっているのは1番組のみ。



6. 結果の考察

Bタイプにみられたようにコミュニケーション能力が重視されすぎているのではないかなど番組の中で社会の価値観を問うことは、発達障害概念がどのような社会的背景の下で生まれてきたのかに目を向けることにつながりうる。そのことは、特定の特徴を「個人の病気」とみなす視点を自明視してよいのかと問うことにつながりうるはずである。しかし、それではAタイプの語りと矛盾することになる。実際には図に示したような揺らぎはみられるものの、Bタイプの語りは深められず、発達障害は「個人に内在する病理的問題」であるとする捉え方が維持されているのが多くの番組で観察される。

NHKテレビ番組は社会的影響力が強い語りであると思われるが、落ちつきのなさなど特定の特徴が「個人の病気の問題」と捉えられ、「実は発達障害」と語られることで、それら特徴の医療化に寄与する可能性があることが見て取れる。

■主要参考文献
 コナラド, P.・シュナイダー, J.W. (2003). 『逸脱と医療化: 悪から病いへ』 杉田聡・近藤正英訳. MINERVA社会学叢書23. 京都: ミネルヴァ書房.
 森田洋司・進藤雄三編 (2006). 『医療化のポリテイクス: 近代医療の地平を問う』 シリーズ社会問題研究の最前線 1. 東京: 学文社.

日本語の関係節の処理に有生性が及ぼす影響—セルフペースリーディング実験による日本語母語話者と中国語母語話者との比較を通して—

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本語文化専攻 博士後期課程1年 岡崎優樹

1. 研究の背景

日本語の関係節処理において、主語関係節(subject relative clause: SR)と目的語関係節(object relative clause: OR)の処理のどちらが容易であるか、多くの研究の中で議論されている。
 (1)主語関係節: [空所] 映画を見た **花子** はレストランへ向かった。
 (2)目的語関係節: [花子が空所] 見た **映画** はとても面白い。

2. 先行研究

(日本語母語話者対象)
 SR優位: Miyamoto&Nakamura(2003) 非SR優位: 大関(2005)
 (日本語学習者対象)
 SR優位: Kanno(2007) 非SR優位: 澤崎(2009)
 ◆日本語母語話者・日本語学習者ともに、一致した結果は得られていない。

3. SRとORの難易度に関する説明と予測

・関係節産出研究の中で、SRは主要部が有生名詞を取る場合(例:(1))生起率が高い。(大関2005)
 ・関係節産出研究の中で、ORは主要部が無生名詞を取る場合(例:(2))生起率が高い。(大関2005)
 予測①主要部が有生名詞の場合: SRの方がORよりも処理が容易。
 予測②主要部が無生名詞の場合: ORの方がSRよりも処理が容易。

4. 研究課題

①日本語の関係節処理においてSR文とOR文のどちらの処理が容易であるか。
 ②有生性が日本語の関係節の処理にどのような影響を及ぼすのか。
 ③日本語の関係節処理において、日本語母語話者と日本語学習者の間に違いがあるのか。

5. 実験

5. 実験

被験者: 日本語を母語とする大学生・大学院生20名と中国南京農業大学で日本語を専攻する中国語母語話者32名(学年: 4年, 学習歴: 3年1ヶ月)
 実験文: 8タイプ(4+4)×5文(合計90文)
 ◆「NTTデータベース日本語の語彙特性第Ⅱ期(第7巻)」(天野成昭他, 2000)を用いて、領域1から領域4の語彙・頻度・モーラ数・文字数に有意な差がないよう調整した。
 ◆ノミニング調査を行い、SR文とOR文の容認度に有意な差がないことを確認した。

表1. 実験文と領域構成

SR/AA	SR/AI	OR/AA	OR/AI
市長を 守った	秘書は 正しい	市長は 正しい	判断を 下した
秘書が 守った	市長は 正しい	判断を 下した	判断を 下した
情報を 伝えた	情報は 色々な	情報を 色々な	招いた 招いた
番組が 伝えた	情報は 色々な	時間を 費やした	費やした 費やした
論文を 書いた	教授は 多様な	論文を 多様な	評価を 受けた
教授が 書いた	論文は 多様な	評価を 受けた	受けた 受けた
選手を 支えた	会社は 急激な	成長を 成した	成した 成した
会社が 支えた	選手は 急激な	成長を 成した	成した 成した

6. 実験方法

・被験者のペースでスペースキーを押しながら文を読み進める移動式自己ペース読み課題を用いた。



図1. 移動式の自己ペース読み課題の提示例

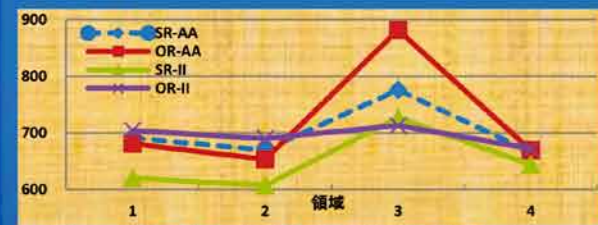


図2. AA+II条件: 日本語母語話者の各領域毎の平均読み時間(ms)

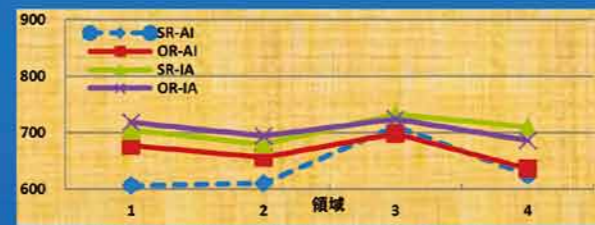


図3. AI+IA条件: 日本語母語話者の各領域毎の平均読み時間(ms)

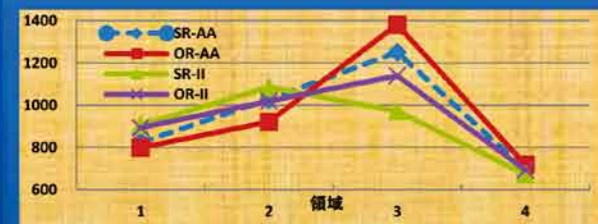


図4. AA+II条件: 中国語母語話者の各領域毎の平均読み時間(ms)

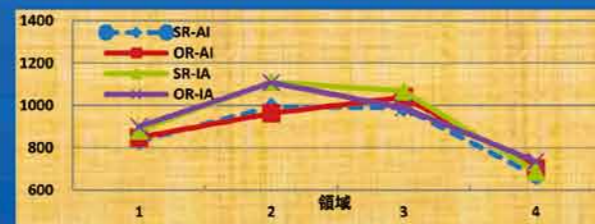


図5. AI+IA条件: 中国語母語話者の各領域毎の平均読み時間(ms)

8. 結果と考察

1. 領域1では、日本語母語話者のみ、II条件とAI条件下ともにSR文の読み時間がOR文よりも有意に速かった。
 2. 領域2では、日本語母語話者のみ、II条件とAI条件下ともにSR文の読み時間がOR文よりも有意に速かった。また、AI条件の読み時間がIA条件よりも有意に速かった。
 ⇒領域1,2の結果から、日本語母語話者は格助詞と名詞の組み合わせによって処理負荷が異なっていた。⇒ラ格を取る無生名詞とガ格を取る無生名詞の読み時間の差が最も大きかった。
 3. 領域3では、日本語母語話者と中国語母語話者ともに、AA条件とその他の条件(II, AI, IA)との間に有意な差があった。また、日本語母語話者のみAA条件下でSR文の読み時間がOR文よりも有意に速かった。
 4. 日本語母語話者の結果は、予測①・②に沿うものであった(II条件を除いて)。⇒関係節の処理には有生性の影響が大きい可能性がある。
 5. 中国語母語話者の結果は、予測①・②に沿うものではなかった。⇒中国語母語話者は、語彙負荷の影響を受けていた可能性がある。
 6. 今回の結果は、SRとORどちらか一方への優位性を示すものではなかった。

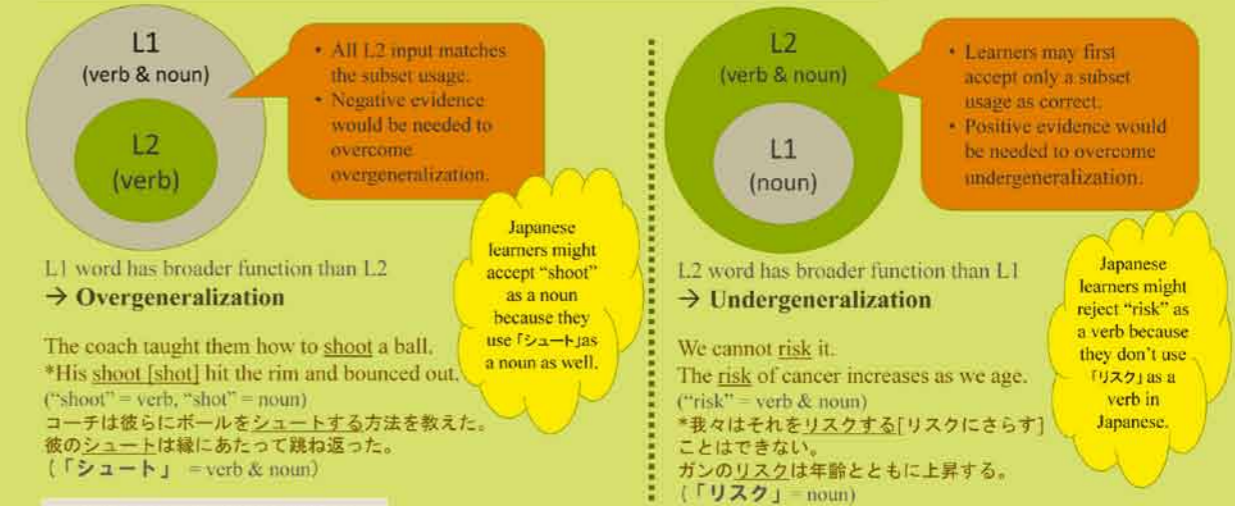
参考文献

大関(2005)「日本語名詞修飾節の産出は普遍的習得難易度階層に従うか」「第二言語としての日本語の習得研究」8, 64-82
 Kanno, K. (2007). Factors affecting the processing of Japanese relative clauses by L2 learners. *Studies in Second Language Acquisition* 29, 197-218.
 澤崎(2009)「日本語学習者の関係節理解-英語・韓国語・中国語母語話者の一読み時間からの考察-」『第二言語としての日本語の習得研究』12, 96-106.
 Miyamoto, E.T., and Nakamura, M. (2003). Subject/Object Asymmetries in the processing of Relative clauses in Japanese. In G. Garding and M. Tsujimura (Eds.), *Proceedings of the 33rd West Coast Conference on Formal Linguistics*, 342-355. Somerville, MA: Cascadia Press.
 天野成昭・近藤公久 (2000)『日本語の語彙特性 第2期(第7巻)』三省堂出版

How Do L1 Loanwords Affect L2 Learning?

English Professionals Training Course M2 Hiromi Matsumoto

Superset and Subset (for Japanese learners of English)



Research Question

How do L1 loanwords affect L2 learning for EFL and JFL/JSL learners?

Can they overcome "Superset-Subset" problems as they become more proficient?

Type	English	Japanese (Katakana)	L1 Influence	Subset/Superset
Type A	Verb "The coach taught them how to shoot a ball." *"His shoot [shot] hit the rim and bounced out."	Verb & Noun 「コーチは彼らにボールをシュートする方法を教えた。」 「彼のシュートは線にあたって跳ね返った。」	Negative overgeneralization	J > E
Type B	Verb & Noun "We camp every summer in the woods." "We set up our camp under a tall tree."	Verb & Noun 「私たちは毎年夏に森でキャンプする。」 「私たちは高い木の下にキャンプを設営した。」	Positive	J = E
Type C	Verb & Noun "We cannot risk it." "The risk of cancer increases as we age."	Noun 「我々はそれをリスクする[リスクにさらす]ことはできない。」 「がんのリスクは年齢とともに上昇する。」	Negative undergeneralization	J < E

Tests (currently under way)

Method: Grammaticality Judgment Tasks (untimed)

Participants: 63 Japanese learners of English (intermediate:60, high:3) / 11 English learners of Japanese (intermediate:5, high:6)

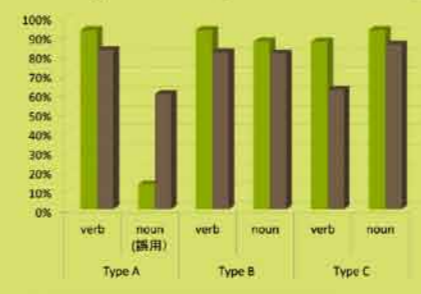


Figure 1

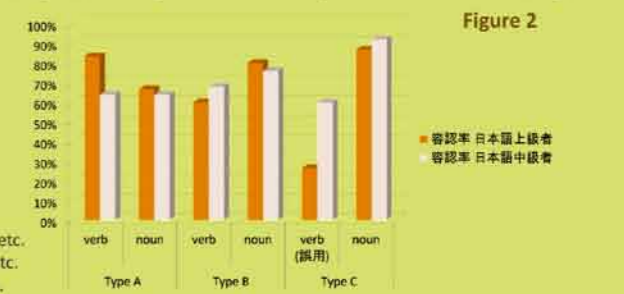


Figure 2

Results (as of now)

As Figure 1 shows, intermediate Japanese learners of English have difficulty in correctly rejecting type A nouns ("shoot", "arrange", "open", etc.), and also in correctly accepting type C verbs ("risk", "balance", "impact", etc.). This indicates that they over-/undergeneralize their L1 knowledge, and that superset/subset problems are difficult to overcome at an intermediate level.

Figure 2 shows that intermediate English learners of Japanese are prone to wrongly accept Type C verbs when they are presented in an ungrammatical way (*「リスクする」, *「インパクトする」, etc.), indicating overgeneralization of their L1 knowledge. Even for advanced learners, type C verbs remain most difficult.

From both results, it can be said that learners are likely to negatively transfer their L1 knowledge to L2 at an early stage of learning (and sometimes at a later stage, too), and that loanwords do affect their language learning when their relations between L1 and L2 fall into subset/superset categories.

韓国人日本語学習者による多義動詞の習得における母語の影響 —典型性と転移可能性の観点から—

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本語文化専攻 日本語教育学講座 博士後期課程
薛 惠善 (seol.hyeseon@b.mbox.nagoya-u.ac.jp)

研究背景

- 第二言語学習者には、母語(L1)と目標言語(L2)の言語的差異によるものとは思えない誤用が見られる→何に起因するのか?
- L1典型度がL2語彙習得における転移可能性に影響する: Kellerman(1978), 加藤(2005)→L1転移可能性は、L1とL2の言語的差異だけでなく、学習者が認識するL1の有様性とL1とL2間の心理言語的距離に関連している
- 本研究: 韓国人日本語学習者が、韓国語の動詞 '열다 [yelta]' と '보다 [pota]' に対応する日本語の動詞 アク/アケル/ヒラクとミルの多義性を習得する際、(1) L1項目の用法の典型度がL1転移に影響するのか、(2) L1のみに存在する用法にも転移が見られ、それがL2の習得の困難性につながるのかを、習熟度の影響も考慮して検証すること

研究課題

- ① L1の転移は、学習者がL1項目に対して感じる**典型度**が高いほど生じやすいか。
- ② L2多義動詞を習得する際、**L1と同じ用法がL2に存在するか**が転移可能性に影響するか。
- ③ 学習者の**習熟度**は、L2多義動詞の習得における転移可能性にどのように影響するか。

研究方法

典型度調査

・被調査者: 韓国語母語話者 56名
・方法: yeltaとpotaの各用法の典型度を1-9の数値で判断→平均値に基づき高・低の項目に分類

発話テスト

・被調査者: 日本語母語話者22名, 日本語学習者35名(下18, 上17名)
・方法: 絵の状況を描写した文の空所を口頭完成

正誤判断テスト

・被調査者: 日本語母語話者40名, 日本語学習者64名(下30, 上34名)
・方法: 紙面で提示された文の正誤を○×で判断

表1 調査に使用したテスト項目

典	열다[yelta]		보다[pota]	
高	창문을 열다	窓を開ける	TV를 보다	テレビを見る
	약국이 열다	薬局が開く	책을 보다	*本を見る(読む)
	입을 열다	口を開く	영화를 보다	*バクさんと見る(会う)
	마음을 열다	心を開く	날씨를 보다	天気を見る
低	가게를 열다	お店を開く	시험을 보다	*試験を見る(受ける)
	파티를 열다	パーティーを開く	아이를 보다	子どもを見る
	회의를 열다	会議を開く	만만히 보다	甘く見る
		사회를 보다	*司会を見る(する)	

結果

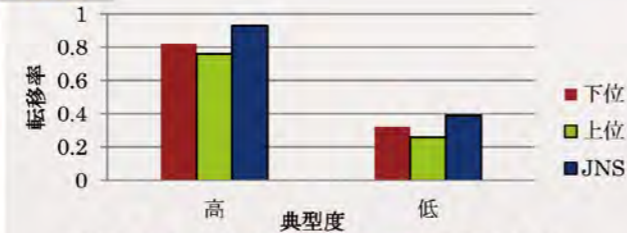


図1 各グループにおけるアク/アケル/ヒラクの使用率(発話) 【典型度の影響あり, $F(1,33)=62.140, p<.001$ 】

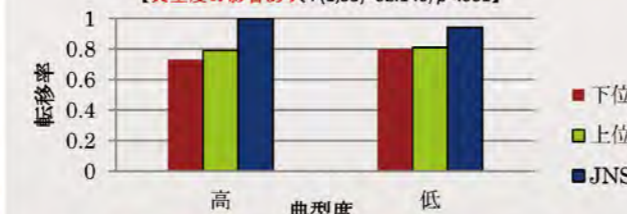


図2 各グループにおけるアク/アケル/ヒラクの容認率(正誤判断) 【典型度の有意な影響なし, $F(1,62)=1.733, p=.193$ 】

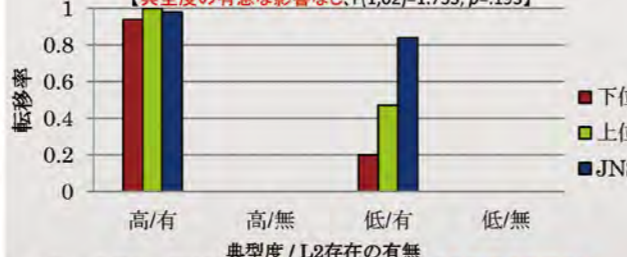


図3 各グループにおける밀の使用率(発話) 【典型度の影響あり, $F(1,33)=65.450, p<.001$ 】 【L2有無の影響あり, $F(1,33)=360.610, p<.001$ 】

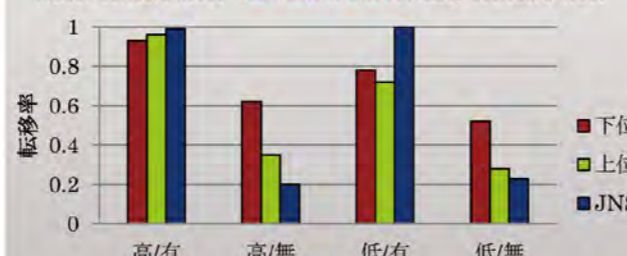


図4 各グループにおける밀の容認率(正誤判断) 【典型度の影響あり, $F(1,62)=15.920, p<.001$ 】 【L2有無の影響あり, $F(1,62)=92.723, p<.001$ 】

- ① L1転移は学習者が感じるL1典型度が高いほど起こりやすいが、学習者が認識する言語間の距離とL2知識にも影響される。
- ② L1の用法が日本語としては正しくない場合にも、学習者は転移を行う。
- ③ 習熟度が上がるとともに、L2に存在しない用法に対するL1の転移はなくなっていく。

参考文献

加藤 稔人(2005)。「中国語母語話者による日本語の語彙習得—プロトタイプ理論、言語転移理論の観点から—」、『第二言語としての日本語の習得研究』8号, 5-23.
Kellerman, E. (1978). Giving learners a break: Native language intuitions as a source of predictions about transferability, *Working Papers on Bilingualism*, 15, 59-92.

「おこがましい」「口幅ったい」「差し出がましい」の類義語分析

国際言語文化研究科 日本語文化専攻 現代日本語学講座 博士後期課程 3年 関ソラ

1. 研究の背景と目的

・「おこがましい」「口幅ったい」「差し出がましい」は類義語である。
(1) 子育てをしたことのない私が言うのも差し出がましい[おこがましい/口幅ったい]ですが、結局は両親が楽しそうにいる場所(個人ブログ「教育の窓」ある退職校長の想い: 教員にとっての研究研修とは、(2)のコメント)

・しかし、形式が違うことから、意味においても何らかの違いがあることが予測される。
(2) 「先生、差し出がましい[?おこがましい/*口幅ったい]とは思いますが…」前置きをしてから、恭子はためらいがちに言ってみた。「藤原くんを抜擢するにしても、もう少し、近藤くんや他の生徒たちへの配慮をしたほうがいいんじゃないでしょうか」(八神ひろき(原作・画): 金春智子(作)『Dear boys』)

・この3語の意味を分析し、その違いを明確にすることで、より教養のある日本語の話し方の教育と、我々が言語生活において何を意識しているかの理解が可能になる。

2. 先行研究(辞書)の検討

『大辞林 第三版』
おこがましい
1 分不相応である。さしでがましい。出過ぎたことだ。
2 いかにもばかげている。全くばかばかしい。

くちはばったい 身のほど知らずの偉そうな口のききようである。言うことが身分不相応でなまじいだ。

さしでがましい 出しゃばるような感じを与える。よけいなことをするような感じがする。

→類義語の羅列に過ぎず、それぞれの意味の違いが明確ではない。

3. 分析

3.1 「おこがましい」と「口幅ったい」

(3) 先輩ぶっていると思われるのは嫌だなど思うときもありますが、一生懸命やっている若い人への、ちょっとした(演技の)ヒントになるかなと思った時は、口はばったい[おこがましい]けれども、なるべく話をするようにしています。(中日新聞、2003. 11. 19)

→おこがましい・口幅ったい: ①ある言動が、その言動をする人に許される言動の範囲を超えており、望ましくないと感じる場合用いられる。

(4) ラウラのほうから、おこがましくも[*口幅ったくも]おのれを殿下に売り込んだり、印象づけようとしたのだな、と察しましたので、このうち万一にもあの小むすめがそれでいい気になってますます殿下に近づこう、などというおかしな考えをおこしては、わたくしがルナンさまに怒鳴りとばされてしまいます。(栗本薫、『消えた女官』)

→口幅ったい: ②判断の対象が<言い方または言う内容>に限られる。

(5) 茶っつと倶楽部母の輪がますます盛り上がっていきまますよう祈念しております。(省略)今の時代は、親も孤独なのかもしれません。そういう意味でも、貴会の存在は、きっと大きい支えになると思います。口幅ったい[?おこがましい]言い方になりますが、貴会は、学校にとってもとてもありがたい存在ということができると思います。(個人ブログ「教育の窓」ある退職校長の想い: 教員にとっての研究研修とは、(2)のコメント)

→おこがましい: ②言動の受け手がその言動をした人に対してマイナス評価を下す可能性が極めて低いと話し手が判断した場合は用いられにくい。

3.2 「おこがましい」と「差し出がましい」

(6) おこがましい[*差し出がましい]けれど、東京大学という最高の最高学府と「お勉強とあんまり縁のない」美術大学とは、そういう意味で近いものがあるのかもしれない。(中島信也、『佐藤雅彦全仕事』)

(7) 過去の手術歴や「いついつから生理不順」といった、ついでながら医師に知っておいてほしいことなども書き加えておくとよいでしょう。医師に対してさしでがましい[?おこがましい]かな、などと遠慮することはありません。(日野原重明、『生きかた上手』)

→差し出がましい: ①ある言動がその受け手の権限を侵し、望ましくないと判断する場合用いられる。

3.3 「口幅ったい」と「差し出がましい」

(8) 理想にはまだ程遠い私がいうのも口幅ったい[*差し出がましい]なのですが、以下の諸点を忘れないよう毎日心がけています。(http://okagesama.jp/lawyer.html)

→差し出がましい: ②ある言動がその受け手に関するものである場合に用いられる。③ある言動がその受け手の考えと対立しない場合は用いられにくい。

4. 結論

おこがましい: <ある言動の受け手の、その言動を起こした人に対する評価がマイナスに傾く可能性のある言動をすることが><その言動をする人に許される言動の範囲を超えており><望ましくないと感じるさま>

口幅ったい: <ある人の言い方または言う内容が><その人に許される言動の範囲を超えており><望ましくないと感じるさま>

差し出がましい: <受け手に関わるある言動が><その受け手の考えと対立しており><受け手の権限を侵すため><望ましくないと感じるさま>



『天演論』から見た厳復の政治思想 — 訳文分析を中心に —

名古屋大学 国際言語文化研究科 日本語文化専攻
比較日文化学講座 博士後期課程2年 宋曉焜



『進化と倫理』(Evolution and Ethics)

作者: ハクスリー

(Thomas Henry Huxley, 1825年~1895年)

* 『進化と倫理—プロレゴメナ』
Evolution and Ethics. Prolegomena, 1894

計15節、各節にローマ数字の見出し

* 『進化と倫理—ロマネス講演』

Evolution and Ethics. The Romanes Lecture, 1893

9の部分から構成されているが、見出しなし

『天演論』

1897年12月から連載、1898年2月に連載中止
1898年6月、単行本

訳者: 厳復 (1853年~1921年、清末の思想家、翻訳家。1877年~1879年イギリス留学)

* 巻上 導言十八篇

* 巻下 論十七篇

この35篇にはほとんど2文字の見出しが付されており、全体的に中国古典のように見える。

訳文と案語(厳復の評語)から構成されている。

時代背景 原著: イギリスのヴィクトリア朝時代、帝国の絶頂期、植民地拡張
訳書: 清朝末期、日清戦争に敗れ、半植民地半封建社会

1 危機感が伝わる訳書

* 学術的な原著→感情的で煽動的な訳書

訳文に加筆: 自立する者は強くなり、強くなると、みな繁盛する。
自立しない者は弱くなり、弱くなると、滅亡する。

2 文明観

① 植民地の正当化

原文: 前世紀中葉にたとえばタスマニアのような地域に植民地を作るために送り込まれた一群の**入植者**のことを考えてみよう。

訳文: 今たとえばイギリスでは数百人が、**自国の人口膨張によって生計を支えるのが困難であった**としよう。そのため、彼らは**新しい地域を開墾**することを決め、船に乗ってオーストラリアの南島であるタスマニアに到着した。

* 厳復は案語で、イギリス人がいる租界は制度が整い、恰も敵国のように威勢が強いと語った。彼は租界から**脅威**を感じながら、イギリス人があれほど「自治」を行って「合群」(社会の結合力を高める)できることを羨望している。羨望があるからこそ、彼は**植民地を正当化し**、イギリスの政治をモデルとして中国の読者に提示しようとしたのだろう。

② 華夷思想の打破 案語: **荒地開墾**が順調に実施されるかどうかによって、**民種の本望**が判断できる。

3 人民の進化

* ハクスリーの口を借り、厳復自身の三民思想を打ち出した。

原文: 入植者の**勇気**、**勤勉**および**集団的知性**

訳文: 民力、民智、民徳

* 政府主導型の人民進化

訳文に加筆: 故に**学校を運営**する。教育制度が整えられれば、智、仁、勇が備わる民が培われる。

ただ**公道**(公正な道理)を守り、**人材を求めれば**、すなわち其の治は理想的な状態に至る。

翻訳のズレ: 正義(justice)→刑賞(刑罰と褒賞)

政府は刑賞を行って公道を守り、政府は競争をしかけて人材を求め、政府は学校を運営して民を培う。一言でいえば、厳復が主張した人民進化は、**政府主導型の人民進化**である。

感情的で煽動的な訳書

危機感を伝える

エリートに刺激を与えて

植民地の正当化
華夷思想の打破

文明国のイギリスをモデル

政府を動かして

政府主導型の人民進化

研究方法

本論では主に『天演論』の訳文と原著の相違に焦点を当て、厳復の人生体験、案語、初期の論説と結び付けて彼の翻訳に表現された政治思想を分析する。
その際、福沢諭吉の近代政治思想とも比較して両者の類似点と差異を明らかにする。

厳復と福沢の比較

福沢: 何れの時か一度は日本の国威を耀かして、印度支那の土人等を御すること英人に倣ふのみならず、其英人をも奪めて東洋の権柄を我一手に握らんものごと、壯年血気の時節、窃に心に約して今尚忘るゝこと能はず。——「東洋の政略果して如何せん」1882年

① 両者ともに植民地の正当性を認めたが、**厳復は脅威**を感じ、**イギリスの政治を学ぼう**とした。他方、**福沢は野心**を燃やし、**日本の植民地拡張を望んだ**。

福沢: 欧羅巴諸国並に亜米利加の合衆国を以て最上の文明国と為し、土耳其、支那、日本等、重細亜の諸国を以て半開の国と称し……
——『文明論之概略』1875年

② 厳復は自負心の高い中国人に向けて**露骨に西洋との差**を言わず、迂回して訴えている。
福沢は率直に**文明の優劣**を述べた。

福沢: 国民の力と政府の力と互に相平均し、以て**全国の独立を維持**す可きなり。
——『学問のすゝめ・四編』1874年

③ 厳復が主張した人民進化は、**政府主導型の人民進化**である。
福沢は**独立に焦点**を当て、**政府の主導**を拒否し、**国民の力**も必要だと強調した。

「就労者としての外国人」が書いた文章に対する 日本語母語話者の評価 — 人事担当経験者と非経験者の比較 —

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 千葉月香
tsukitsukimm@gmail.com

1. 研究背景と目的

➢ 就労者としての外国人の日本語に関する研究は実態調査(前村,2012)やニーズ調査(金田,2013)が多い

➔ 就労者としての外国人の日本語が**どのように評価されているか**、調査が必要

➢ アカデミック場面(田中他,1998)や生活場面(宇佐美他,2009)を対象とした評価研究が多い

➢ 就労場面や求職場面を扱っていても留学生の日本語を対象とした研究(齊藤,2013)が多く、就労者を対象としたものは無い

➔ 就労者としての外国人が**実際の求職場面で用いる日本語の評価**の調査が必要

2. 研究課題

① 人事担当経験の有無によって外国人が書いた履歴書の志望動機欄の記述に対する採点結果は異なるか

② 人事担当経験の有無によって外国人が書いた履歴書の志望動機欄の記述を評価する際に着目する評価観点は異なるか

3. 方法

◆ 文章素材

➢ 履歴書の志望動機欄として、地域在住の外国人が書いたもの

◆ 評価者

➢ 人事担当経験が有る一般日本人17名、人事担当経験が無い日本語教師16名(調査協力は日本語母語話者53名)

◆ 評価手順

➢ 文章5編を「**企業の人事担当者**」の立場で採点(5点満点)

➢ 点数の根拠を記述

◆ コメントの分析方法

➢ コメントをアイデアユニットごとに分割

➢ 内容によって分類

4. 結果

◆ 採点結果

➢ 大きな**差は無い**

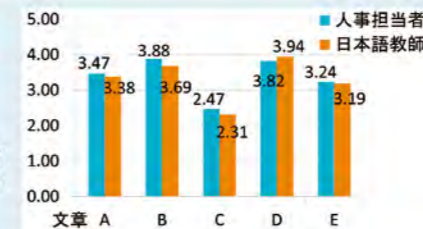


図1 採点結果 平均点

◆ 採点の根拠

➢ **書き手、内容、言語、構成・形式**の4分類を作成

➢ 人事経験の有無に関わらず、**書き手と内容**のコメントが約8割

➢ 人事経験者は**書き手**に着目し易い

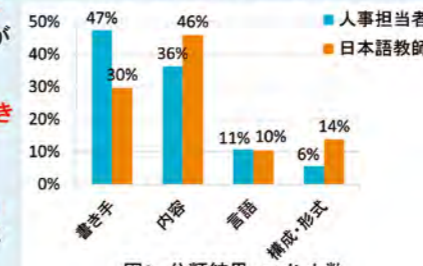


図2 分類結果 コメント数

➢ 日本語教師は**内容と構成・形式**に着目し易い

5. 考察

◆ 研究課題①

➢ 人事担当経験の違いで採点結果に**差は無い**

「企業の人事担当者」の立場で評価をするよう指示した。
➔ 評価の視点を定めることで評価者の経験による影響を抑制できる可能性

◆ 研究課題②

➢ 人事担当**経験者**は**書き手自身の能力や人柄**を評価

コメント例: 同職種の経験から即戦力になりそう、長い就労経験から勤務する力を感じる、人間関係に前向き、協調性がありそう

➢ 人事担当**非経験者**は**提出された文章の良し悪し**を評価

コメント例: 文がまとまっている、文法的な誤りは無い、経歴と希望に関連がなく一貫性が無い、無駄なアピールが多すぎる

下位分類 分類結果

分類	下位分類	人事担当者	日本語教師
1 書き手	(1) 仕事での貢献	47(22%)	24(12%)
	(2) 人物像	26(12%)	9(4%)
	(3) やる気	9(4%)	8(4%)
	(4) コミュニケーション	20(9%)	19(9%)
2 内容	(5) 趣旨の明確さ	0(0%)	6(3%)
	(6) 必要な情報の有無	78(36%)	86(43%)
	(7) 矛盾	0(0%)	1(0%)
	(8) 表現・語彙	2(1%)	1(0%)
3 言語	(9) 文字	6(3%)	6(3%)
	(10) 漢字	8(4%)	3(1%)
	(11) 正確さ	7(3%)	11(5%)
	(12) 構成	2(1%)	14(7%)
4 構成・形式	(13) 一貫性	2(1%)	8(4%)
	(14) 文章形式	4(2%)	5(2%)
	(15) 記号の使用	4(2%)	1(0%)
	計	215(100%)	202(100%)

6. まとめと課題

◆ まとめ

➢ 人事経験の差によって**評価の根拠が異なる**

➢ 人事担当**経験者**は**入社後の書き手の仕事での期待度**を、日本語教師は**提出された文章自体**を評価

◆ 課題

➢ 人事担当の業種によって評価観点が異なる可能性

➢ 「採点」という評価方法の妥当性の検討が必要

参考文献

- 宇佐美洋・森篤嗣・吉田さち(2009)「生活場面で必要となる日本語書き言葉」に対する母語話者の評価—どうする場合に、なぜ評価はばらつくのか—『待遇コミュニケーション研究』6, 待遇コミュニケーション学会, pp.33-48.
- 金田智子(2013)「生活者」としての外国人に対する日本語教育の確立をめざして『国語研プロジェクトレビュー』3, pp.142-151.
- 斎藤仁志(2013)「就職面接で外国人留学生の受け答えに対し日本人ビジネスパーソンは何をどう捉えるのか—留学生のキャリア支援における基礎的研究—」『長崎ウエスレヤン大学地域総合研究所紀要』11-1, 長崎ウエスレヤン大学, pp.53-60.
- 田中真理・坪根由香里・初鹿野阿れ(1998)「第二言語としての日本語における作文評価基準—日本語教師と一般日本人の比較—」『日本語教育』96, 日本語教育学会, pp.1-12.
- 前村奈央佳(2012)「日系ブラジル人求職者の日本および日本人同僚への態度調査—広島県D社の事例より—」『移民研究』8, 琉球大学, pp.43-56.

Mood Usage and Ideology in a Japanese Newspaper Editorial

XIE Xiaojian, Media Professional Course, Graduate School of Languages and Cultures, Nagoya University

1. Introduction



President Obama gave his "Prague Speech" on 5th April 2009.

- 1) In the speech he stated "America's commitment to seek the peace and security of a world without nuclear weapons".
- 2) The speech came one day after North Korea launched a rocket.
- 3) No official Japanese translation was provided.



- 4) In Japan, the speech was widely reported by the news media.
- 5) The media had a responsibility to report accurately and correctly.
- 6) But it is impossible to "simply report the facts".
- 7) Journalists create texts on the basis of ideology.
- 8) *What is the ideology behind the reporting of this speech?*

2. Theory and Method

CRITICAL DISCOURSE ANALYSIS (CDA).

- 1) Fundamental insight: language is a material form of ideology.
- 2) Linguistic relations are also ideological or power.
- 3) Definition of Ideology: "representations of aspects of the world which can be shown to contribute to establishing, maintaining and changing social relations of power, domination and exploitation" (Fairclough 2003: 9).

SYSTEMIC FUNCTIONAL LINGUISTICS (SFL)

- 1) Languages are 'meaning potentials' that provide users with choices, arranged as 'system networks'.
- 2) Lexis ("terrorist" VS "freedom-fighter").
- 3) Grammar ("The boy is kicking the ball" or "The ball is being kicked by the boy").

3. Previous Studies

Ingroup Emphasize good actions	Ingroup Mitigate bad actions
Outgroup Mitigate good actions	Outgroup Emphasize bad actions

Fig. 1 The Ideological Square (Van Dijk 1998)



Asahi Shimbun editorial

6. Summary



7. References

Fairclough, Norman (2003). *Analysing Discourse: Textual Analysis for Social Research*. London: Longman.
 Halliday, M.A.K. and Matthiessen, Christian (2004). *An Introduction to Functional Grammar*. 3rd ed. London: Arnold.
 Takagi, Sachiko (2004). Media desukosu no ideorogi hyoushutsu sutorateji: Iraku sensou kanren no shasetsu ni okeru "We-group" no kousatsu (Strategies for Articulating Ideologies in Media Discourse: A Study of "We-group" in Editorials on Iraq War). *Language and Culture*, 3, 9-19, Osaka Prefecture University.
 Teruya, Kazuhiro (2007). *A Systemic Functional Grammar of Japanese*. London: Continuum.
 Van Dijk, Teun (1998). Opinions and Ideologies in the Press. In Allan Bell and Peter Garrett (eds.), *Approaches to Media Discourse* 21-63. Oxford: Blackwell.
 Wodak, Ruth and Meyer, Michael (ed.) (2009) *Methods of Critical Discourse Analysis*. 2nd ed. London: Sage.

『悲情城市』に隠されている女性の声 と脱コロニアル記憶—音声分析を中心に

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科国際多元文化専攻 ジェンダー論講座博士後期課程1年 楊金娣 (YANG JINDI)



五四運動における周作人のヒューマンイズム思想の内実 — 児童の発見を中心に —

名古屋大学大学院 国際言語文化研究科 日本語文化専攻 博士後期課程3年 鄭恵

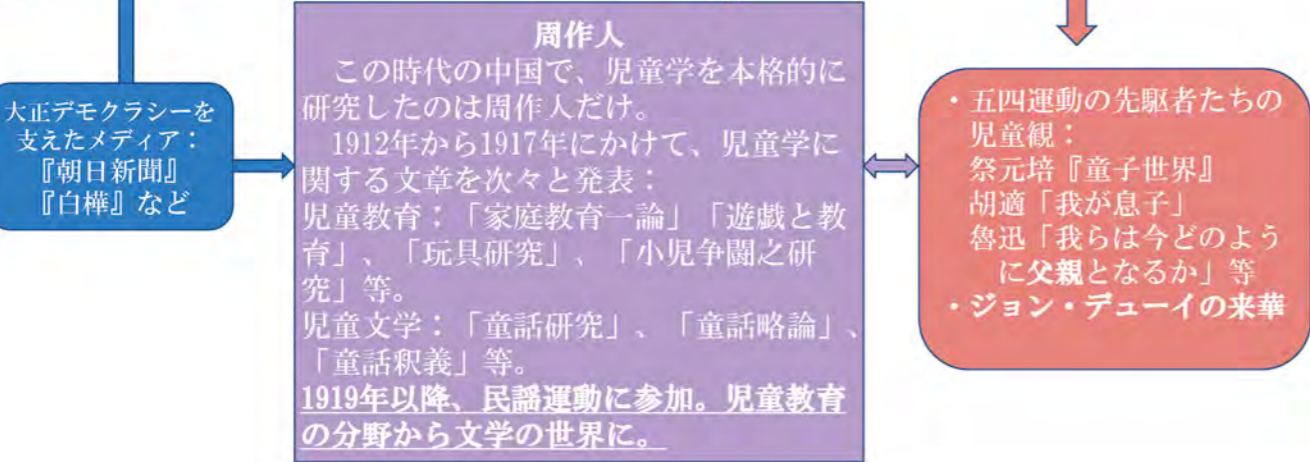
研究要旨: 五四運動の先駆者である周作人の代表作『人の文学』は彼のヒューマンイズム思想の結晶と見ることができる。周が帰国した時期は中華民国元年、大正元年の1912年だった。日本通の周は大正時代に注目され始めた児童の存在を重視し、西洋の児童学も研究した。しかし、近代教育がまだ定着していない中国においては、周作人の求める児童教育の実現は困難だった。日中近代化の展開のずれに苦しんだ周作人のなかに、中国の近代化が抱えた諸問題が窺われる。

明治末期大正時代
 1872年 学制の発布
 就学率は男子40%・女子15%
 1879年 「教育大旨」の公布
 1890年 「教育勅語」の発布
 1903年 『家庭雑誌』の創刊
 1907年 義務教育を6年間に延長
 1911年 小学校の就学率が98.1%
 1914年 『少年倶楽部』の創刊
 1918年 『赤い鳥』の創刊

清末民国時代
 1903年 『奏定学堂章程』が公布。新学制教育が開始、蒙養院が設立。当時の就学率は0.2%
 1905年 科擧制度が廃止
 1909年 全国小学堂数50265件、在籍人数1499434人
 1912年 壬子癸丑学制が実施、「師範教育令」が発布
 1919年 五四運動が興る

明治末期大正時代における児童教育
 児童教育の性格が、愛国教育から「子供本位」のリベラルな家庭教育に変化。
 ・西洋の教育理論の輸入：
 1891年 マレソンの『家庭教育原理』刊行、
 1894年 ロックの教育論を土台とした山田禎三郎の『家庭教育』刊行、
 また、『青踏』誌にエレン・ケイ『児童の世紀』の翻訳等が掲載される。
 ・社会背景：
 日清・日露戦争を契機として、女子の職種が増加。女子の職業教育の必要性。家族関係は父系制度から夫婦平等、子供の人格と権利の尊重など核家族型の理想が提唱される。明治末期の核家族はホワイトカラーとキリスト教徒の家庭に限られていたが、大正になると、平民社会に広がってきた。

清末民国時代における児童・女子教育
 児童教育の重要性に覚醒した清政府は義務教育の普及を急務として着手したが、民国11年の新学制が公布されるまで、父系制度における女性、児童の位置づけには変化がなかった。
 ・清末における先覚者たちの啓蒙思想：
 鄭観応『盛世危言・女教』、康有為『大同書』、梁啓超『变法通議』の「女学論」、『清議報』の「少年中国説」等。その目的は救国であり、近代的家族観の普及とは無縁だった。
 社会背景：
 義務教育が強制された結果、民国時代になっても廃校運動が絶えなかった。



平成25年度認定、修士論文一覧表 (平成25年9月27日付け修了)

氏名	題目
庄 廉珍	The sensitivity of native Japanese speakers to English tense inconsistency in "when" clauses as measured by eye-tracking technique
張 弛	A Comparative Study of Critical Debates over Popular Artists in Japanese and Chinese Online Communities
村松 里実	ビデオアートの構造から考察する現代のメディア・コミュニケーションの在り方
EMPTAZ-COLLOMB Sebastien Claude Jeannot	Disney, in Other Words: A Comparative Study of Disney Songs in French and Japanese Translation
DOYEN Daniel Raymond	A discourse analysis study of alcohol advertising and underage consumers in Japan

平成25年度認定、修士論文一覧表 (平成26年3月25日付け修了)

氏名	題目
浅野 順子	日本語教師4名が持つビリーフの比較 —半構造化インタビューの質的分析を通して—
岡崎 優樹	日本語の関係節の処理に有生性が及ぼす影響 —セルフペーストリーディング実験による日本語母語話者と中国語母語話者との比較を通して—
KOLKO Maria	黒澤明の『白痴』 —小説から映画へ—
WIJAYA Sylvia	連体修飾節におけるインドネシア語のdi-受動態の統語的・語用論的特徴 —日本語との比較を通じて—
薛 惠善	韓国人日本語学習者による多義動詞の習得における母語の影響 —典型性と転移可能性の観点から—
孫 暁鷗	魯迅における芥川文学の受容
立松 実里	JSL環境における日本語学習者の願望疑問文使用とその要因
千葉 月香	「就労者としての外国人」が書いた文章に対する日本語母語話者の評価 —日本語教師と一般日本人の比較—
張 鈺	郁達夫文学における病と憂鬱 —大正文学との関連性を通して—
張 婧禕	中国人日本語学習者による和製英語および流行語の習得
鄧 瓊	中国語母語話者と韓国語母語話者における日本語の「に」と「で」の習得
HAMLITSCH Nathan Jesse	和語・漢語に相当する意味をもつ外来語の機能 —コーパスを利用した形態論的アプローチ—
東 聖菜	中上級日本語コースにおける口頭発表のモニタリング基準と自己評価 —日本語教師による評価と比較して—
HENI HERNAWATI	日本語サ行、ザ行、シャ行、ジャ行の摩擦子音の音声的特徴 —ジャワ語とスダ語を母語とするインドネシア人学習者を対象として—
楊 悦	『うつほ物語』における俊蔭女の人物像研究
李 鴻	『源氏物語』における髭黒の北の方の離婚の成立

氏名	題目
斉場 真由美	A Study of <i>The Tenant of Wildfell Hall</i> through Margaret Atwood's Survival Theory
加藤 倫子	新聞報道における「格差社会」言説の分析
根本 佐和子	韓国語の動詞 '만나다' (mannada) と '만나다' (mannada) の意味で用いる '보다' (boda) に関する研究
張 夏	Do Cultural Factors Affect Online Communications of Japanese and Chinese EFL Learners?
天野 直亮	Contribution of Pronunciation Features to Intelligibility and Comprehensibility in Non-native Interaction : A Case of Japanese and Chinese Learners of English
王 皓	フェニックステレビの日本の選挙報道に関するフレーミング研究 —2012年日本衆議院選挙に関するニュースの内容分析に基づいて—
奥間 智絵	Between Daughter and Father : The Inter-Complementary Relationship in Mari Mori's Literature
神尾 太紀	時代のコトバをつくるコピーライターの創造性に関する考察 —インタビュー調査を中心に—
川口 勇作	The Effects of Computer Assisted Vocabulary Learning on Japanese EFL Learners' Writing
釘宮 貴子	明治期における音楽近代化の模索
孔 維佳	在日中国人留学生のSNS利用変化と異文化適応
侯 玉夢	高行健『靈山』に描かれる被害者女性像とその役割について
佐々木 真帆美	From Crime Cinema to Family Drama : Gender Roles in <i>The Man Who Knew Too Much</i> (1934) and its 1956 Remake
朱 玄	*異文化コミュニケーションを可視化するテレビ番組制作に関する考察 『地球村日本町3丁目—国際カップルのライフスタイル』
菅井 大地	Ambivalence in the Treatment of American Idealism in Richard Brautigan's First Three Novels
席 玥	中国語の定語表現における形容詞の意味特徴 —数量詞との位置関係の観点から—
孫 泰喜	デジタルメディア時代の観光広報の一考察 —韓国に名古屋の魅力をアピール—
孫 夢喬	欲望する少女たち —バブル期前後(1984—1993)における「non・no」の表紙分析—

氏名	題目
立石 夏希	「ニコニコ生放送」におけるコミュニケーション構造の分析
陳 曉婧	テレビドラマのインターセクシュアル表象 — 『IS (アイエス) ～男でも女でもない性～』におけるカミング・アウトと(不)可視性
程 遙	情報社会におけるアニメオタクのエスノグラフィ — 中国の日本アニメ字幕組コミュニティに関する考察を通じて—
田 霜	The Use of Prosody in Semantic and Syntactic Disambiguation : Comparison Between Japanese and Chinese Speakers' Sentence Production in English
中野 成晴	SNS時代におけるミュージシャンのPR戦略 — 技術革新の中の音楽産業—
MOVSISYAN Astghik	アルメニア語におけるシュワーについて
矢野 理栄	作家笔下的文化大革命 — 以严歌苓的作品《天浴》和《白蛇》为中心
楊 金娣	『悲情城市』に隠されている女性の声と脱コロニアル記憶 — 音声分析を中心に
叶 コウ	現代中国語の“了”の有する完結性について — 「有界」と「無界」という観点から
吉田 聡子	インターネットの匿名性をめぐる新聞報道の分析
李 旒	現代日本社会におけるベリーダンスの受容と「女性性」の呈示 — 『ベリーダンス・ジャパン』にみるダンサーの自己演出

平成25年度認定、博士論文一覧表

氏名	題目
鄭 在恩	日韓母語話者及び韓国人日本語学習者における「再勧誘」行動に関する語用論的研究
頼 鈺菁	幕末・明治初期における「諫言」の変遷と終焉 — 下級武士の忠誠観を中心に—
張 善実	日本語のV-N型漢語動詞の語構成論的研究 — 離脱・帰着を表す動詞を中心に—
山本 圭	エルネスト・ラクラウの政治思想—敵対性・不審者・デモクラシー—
姜 信和	尹東柱の脱神話化 — トランスナショナルな視座からの再読—
封 静宜	読みの目標が読解過程と理解に与える影響 — 読解指導の応用に向けて—
寺澤 知美	現代中国語の方位詞“上”と“里”に関する研究
梁 青	『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現
謝 平	現代中国語の程度表現に関する研究
入江 友理	Can-do statementsを用いた自己評価における質問項目要因と個人差要因の影響 — 韓国・中国JFL学習者の「聞く」技能を対象として—
初 相娟	中国語話者による日本語の動詞述語の習得
朴 善嫻	二字漢字語のデータベースによる動詞化と形容詞化の日韓対照研究
韓 涛	中国語の概念メタファーに関する研究 — 認知メタファー理論の立場から—
李 海	梁啓超研究—その日本滞在期を中心に—
西尾 祥子	パブリック・ビューイング体験の日独比較分析 — メディア・イベント論の再構築を目指して—
韓 韓	中国近代女子教育における日本受容
木村 正子	ギャスケル文学における母娘関係と女性の生き方 — 女性の持ち場と価値観の変容—
稲田 朋晃	韓国人日本語学習者による日本語アクセントの知覚と産出

『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的表現

梁 青 (日本語文化専攻 比較日本文学講座 博士後期課程 2013 年修了)

本研究は、『新撰万葉集』の漢詩の文化史的意義を新たな視点から捉えなおそうとしたものである。『新撰万葉集』は、寛平御時后宮歌合の歌を主資料に、それぞれの和歌に七言絶句の漢詩が配されるという体裁をとっている。従来、『新撰万葉集』の漢詩は「和臭」の強いものとして低く評価されており、議論の中心も和歌の翻訳として正確か否かといった点に置かれてきた。それに対し、本研究では、『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌的要素は、和歌と漢詩の表現や技巧および発想の交渉の結果であるとした上で、同じ表現における本集漢詩・中国詩・和歌の異同及び影響関係などを丹念に検討し、漢風讚美時代から国風復興時代に移行する過渡期における和漢交渉の様態の解明を試みた。

序章において、本研究の意義と目的を述べた後、第一章では、朝廷や撰家による公宴、私宴の場で詠まれた紫藤詩・九月尽詩・瞿麦花詩・桜花詩を取り上げ、九世紀末の日本漢詩の和歌的表現がどのような場でいかなる意識のもとで詠まれていたのかを具体的に考察した。宇多朝で行われた一連の文事に関する分析を通じて、宮廷応制詩における和歌的表現の多用、公宴詩の詩題の日本化、詩歌同題の文宴の開催などは、いずれも和歌が次第に公的地位を獲得していくという文学史的動向を物語っており、公宴、私宴の場は漢詩と和歌を融合させる一つの大きな契機となることを明らかにした。そこで詠まれた和歌的漢詩表現から、王朝人の国風意識の高揚が端的に窺える。

第二章では、『新撰万葉集』の漢詩にみられる古来の和歌表現の受容を検討した。まず、四季部の漢詩における『万葉集』以来詠まれてきた歌材の受容およびそれらの語にまつわるイメージや季節観の受容の実態を明らかにし、次に『新撰万葉集』恋部の漢詩には、平安朝を舞台にした男女の恋が多く描かれていると論じた。最後に、以上の考察を踏まえた上で、『新撰万葉集』は『万葉集』を強く意識し、古歌の世界を基盤としながらも、その一方で古歌と対峙しつつ当代和歌の新しいあやを誇り、「新撰」を高らかに表明しようとするという二面性を持っており、『新撰万葉集』の漢詩にもこのような「古」「今」の表現世界の対照がはっきりと見えることを指摘した。

第二章は中国にはない、古来の和歌表現の受容を対象とするが、第三章と第四章は中国詩の影響下にある和歌に注目し、「中国詩→本集和歌→本集漢詩」という影響関係を辿り分析した。第三章では、上秋70、上夏35、上恋108の三首を中心に『新撰万葉集』の漢詩にみられる和歌の掛詞や縁語による影響を検討し、第四章では、『新撰万葉集』の比喩表現を取り上げ、それと中国

詩との違い、和歌との関連を検討することによって、本集漢詩の比喩表現の特質を探った。その上で、原典の中国詩では違う文脈に属する表現が『新撰万葉集』の漢詩の中で言葉の連想によって、結合され、新たな意味を持つ表現として形成されていくことが、本集漢詩にみられる特徴の一つであることを明らかにした。

第五章では、『新撰万葉集』の漢詩に用いられた「郭公」と「涙河」の用法を手掛かりに、王朝漢詩文における『新撰万葉集』の漢詩の位相と意義について考察した。結果、それまでの日本漢詩の用語・表現・技法をさらに新しい方向へと前進させたという点で、『新撰万葉集』の漢詩が大きな役割を果たしたことがわかり、『新撰万葉集』の漢詩表現を下敷きにした王朝漢詩が平安中後期に現れたことが明らかになった。

終章では、各章の論点と今後の課題を整理するとともに、『新撰万葉集』の漢詩の和様化の方法を三点確認した。その第一は、「主体の置換」の方法である。日本的なものを『新撰万葉集』の漢詩に取り込もうとすれば、置換可能な中国詩の語句の存在が前提となる。第二は、既存の幾つかの表現を組み合わせることで表現の拡大を図る「表現の複合」の方法である。第三は、中国詩の詩語に含まれる意味の側面のみが強調され、そこから新たな別の意味が派生してくる「意味の転形・変形」の方法である。

名古屋大学大学院国際言語文化研究科 年報 Bulletin L&C 2014 vol.6

2014年10月18日 発行

編集発行：就職・同窓会委員会

福田 真人（日本語文化専攻日本語文化学講座教授 / 研究科長）

長畑 明利（国際多元文化専攻アメリカ言語文化講座教授 / 評議員・副研究科長）

飯野 和夫（国際多元文化専攻多元文化論講座教授 / 副研究科長）

井上 公（日本語文化専攻応用言語学講座教授）

伊藤 信博（国際多元文化専攻助教）

早川 杏子（日本語文化専攻助教）

〒464-8601 名古屋市千種区不老町

URL：<http://www.lang.nagoya-u.ac.jp/>

制作：西濃印刷株式会社

〒500-8074 岐阜市七軒町15番地 TEL：(058) 263-4101